

# WDO 世界デザイン会議東京 2023 関連シンポジウム

## 1973/1989 ICSID 会議と DesignYear が残したもの

2023. 07. 16 ● インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター



### 【日時】

2023 年 7 月 16 日（日）14:00～17:00

### 【会場】

インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター  
（東京ミッドタウン・デザインハブ内）

### 【主催】

一般社団法人国際デザイン研究フォーラム  
WDO 世界デザイン会議東京 2023 実行委員会

### 【共催】

デザイン振興政策アーカイブ・プロジェクト  
日本デザイン学会プロモーションデザイン部会  
東京ミッドタウン・デザインハブ

### ■目次

0. 概要、開催にあたって	1
1. 開会挨拶・趣旨	
1-1. 開会・趣旨説明（青木史郎）	3
1-2. 主催者開会挨拶（田中一雄）	4
2. 1973 年と 1989 年、ICSID 会議とデザインイ ヤー運動の概要（黒田宏治）	6
3. ラウンド・テーブル「1989 年名古屋デザイン 会議への里程」	
3-1. 地域・日本・国際をデザインでつなぐ （藤本清春）	12
3-2. デザインの国際化と ICSID 名古屋会議 （諸星和夫）	16
3-3. 横割りのデザインと地域展開 （山村真一）	20
3-4. 名古屋のデザイン都市行政の展開 （西野輝一）	24
4. 対談「国際化を希求した時代とデザイン」 （宮境修二・青木史郎）	29
5. 質疑応答、閉会「WDO 会議に向けて」	35

## ■開催にあたって

「WDO 世界デザイン会議」が、2023年10月に東京で開催されます。WDOの前身であるICSIDが、日本で最初に開催した1973年「京都デザイン会議」から数えて50年目、また1989年の「名古屋デザイン会議」から数えても、ほぼ30年ぶりの開催となります。そこで、今回のWDOデザイン会議開催に先立ち、過去に開催された2つのICSIDデザイン会議と、それを核に展開されたデザイン啓蒙運動Design Yearを振り返り、それらが日本のデザインの発展に果たしてきた役割を検証しておきたいと考えました。

日本は、インダストリアルデザインのもたらす効果効用をいち早く理解した国の一つです。政府もこれを推奨、日本企業も積極的に導入し、活用を図ることで、国際市場において高い評価を得る商品を次々に生み出してきました。日本にすっかり定着したインダストリアルデザインは、日本の産業の発展と生活の質的向上に大きく寄与してきました。その里程の中で、2回の「ICSIDデザイン会議とDesign Year運動」は、いかなる役割を果たしてきたのでしょうか。

1973年は、インダストリアルデザインへの理解を促しました。また1989年では、様々なデザイン領域の融合や地域への広がりなどが図られています。デザインの社会化という側面からみれば、「ICSIDデザイン会議とDesign Year運動」は、想定以上の成果をあげ得たと思います。しかしその反面、これによりデザイナーの職能意識が向上したとも、企業におけるデザイン活動がより一層進展したとも聞きません。また、日本デザインの国際的なアピールの機会となったとしても、それはICSIDの周辺に留まっていたように見受けられます。

過去2回の「ICSIDデザイン会議とDesign Year運動」は、決して片手間で行われたわけではありません。1973年も1989年も、日本のデザイン界が精一杯の想いを込めて、全力を挙げて取り組んだ、画期的なデザイン運動だったのです。そして、デザインの社会化をもたらす起爆剤とはなり得ました。しかし、その想いを十分に広げられたとは必ずしも言えません。その経緯を掘り下げれば、当時は実現できなかった要因、そして今日に連なる課題が、宝の山のように発見できるのではないかと思います。

そこで「ICSIDデザイン会議とDesign Year運動」について、当時の熱気を覗くことができる「場」を作りたいと考えました。1973年のそれは、もはや歴史の1ページとなってしまいましたが、1989年に開催された「名古屋デザイン会議」については、当時活動を担われた方々の証言を直接お聞することができます。この会議を核として展開されたデザインイヤーについて

考えることで、より巨視的な視点から、これらのデザイン活動を俯瞰することもできそうです。

このシンポジウム「1973/1989 ICSID会議とDesign Yearが残したものは、ICSIDデザイン会議を誘致したデザイナーと、それを運動へと展開しようとした賛同者の方々が、この会議を契機として、日本とデザインに何をもたらそうと考えたかをお聞きすることから始めます。そして、そこから今日の課題を引き出していききたいと思います。

「京都デザイン会議」から50年、「名古屋デザイン会議」から30年余。むしろ時間を経た今日であるからこそ、時代を俯瞰的に捉え適切な評価をおこなうことができ、過去から十分に学ぶことができるのではないのでしょうか。



International Research Design Research

1973/1989 ICSID会議と  
Design Yearが残したもの

WDO世界デザイン会議東京2023 関連シンポジウム

2023年10月に東京で開催される「WDO世界デザイン会議」を前に、1973年そして1989年に日本で開催された「ICSIDデザイン会議」と、それを核に展開された「Design Year運動」が、日本のデザインの発展に果たした役割を検証する。

主催 一般社団法人 国際デザイン研究フォーラム  
WDO世界デザイン会議東京2023実行委員会  
共催 デザイン・創発機構アーカイブ・プロジェクト  
日本デザイン学会プロモーションデザイン研究部会  
東京ミッドタウン・デザインハブ

開催日時 2023年7月16日 日曜日 午後2:00-5:00(次席あり)  
開催場所 東京ミッドタウン・デザインハブ内  
『インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター』  
東京都港区赤坂5-7-1 ミッドタウンタワー5F  
参加無料、Youtube Live配信あり  
お申し込み <https://icsid1973-1989.peatix.com/>

ICSDデザインイヤーをより  
詳細にインダストリアルデザイン会議ICSID73 KYOTO デザイン 発起機構  
世界デザイン会議 ICSID 名古屋デザイン イヤーン 日本支部  
WDO世界デザイン会議東京2023 デザイン 発起機構

青木史郎	田中一雄
高田正治	藤本清典
鎌田和夫	山村真
西野謙一	宮崎博二

# 1. 開会挨拶・趣旨

## 1-1. 開会と趣旨説明（青木史郎）



青木史郎：一般社団法人国際デザイン研究フォーラム  
代表理事／元財団法人日本産業デザイン  
振興会 '89 デザインイヤー推進事務局

それでは、シンポジウム「1973/1989 ICSID 会議と Design Year が残したもの」を開始したいと思います。私は司会進行役を務めます青木史郎と申します。よろしくお願ひいたします。

まず、ご来場いただきました皆さま、そしてオンラインで視聴されている皆さまに、感謝を申し上げます。少し渋いイベントではございますが、最後までお聞きいただければうれしいです。本日はあまりにも暑いので、途中水分補給をしながら、休憩をとりながら、進めさせていただきたいと思います。

さて、日本デザイン振興会が中心となって、「WDO 世界デザイン会議東京 2023」が本年 10 月に開催されることとなりました。WDO の前身であります ICSID は、これまで 2 回の世界デザイン会議を日本で開催しております。最初は 1973 年京都での会議です。2 回目は 1989 年名古屋での開催です。73 年から数えて今年で 50 年となります。そして、名古屋での開催からも既に 30 年を超えました。いずれも昔々の話ではございますが、こうしたことは、やはり繋いでいくということが大切ではないかと考えました。

そこで私たちは、こうした過去を振り返り、それを未来に繋げていく、特に今秋の WDO の会議に繋げていくということから、今回のシンポジウムを企画させていただいた次第です。最初は何人かで勝手連的に始めましたところ、世界会議の実行委員会にも主催に加わっていただけることとなりました。また、東京ミッドタウン・デザインハブにもサポートしていただける

ことになりました。

本日のシンポジウム開催にあたり、WDO 世界デザイン会議東京 2023 実行委員会、そして公益財団法人日本デザイン振興会、東京ミッドタウン・デザインハブには、厚くお礼を申し上げたいと思います。

本日のプログラムを紹介していきたいと思います。最初に、ICSID とか世界デザイン会議とか 1973 年とか言っても、それはかなり昔の話になりまして、特に若い方々は「何だそれは」みたいな話になると思います。そこで、「デザイン振興政策アーカイブ」を私と共に推進していただいている黒田宏治さんに、そもそもこれらは何であるか、どういう経緯で進んできたのか、どういう事業構造であったのかということ、紹介していただこうと思います。頑張って活動された方々にとってはおさらいみたいな話になりますが、まずこれをプログラムに入れさせていただきたいと思います。

そして、本日の中心でありますラウンド・テーブルを、その次に開催していきたいと思います。1989 年のデザインイヤーは、ICSID 世界デザイン会議名古屋、そして世界デザイン博覧会などが開催され、大きく盛り上がってまいりました。ここでは、その概要と経緯、そしてその後の展開について、当時推進を中心になって担われた方々にお話をいただこうと思います。本日まで参加をお願いいたしましたのは、藤本清春さん、諸星和夫さん、山村真一さん、西野輝一さん、この 4 名の方々に熱く語っていただこうと思います。

それを受けまして、やや客観的に考えてみたいと思います。デザイン振興とかデザイン行政という視点から、こうしたデザインイヤー運動の活動はどういうふうを受け止められるかということ、当時通産省でデザイン政策に携わってこられた宮崎修二さんと私で、対談めいたかたちで話をしていきたいと思います。

これで本日用意いたしましたプログラムは終了となり、そのあと限られた時間になると思いますが、皆さまとの意見交換の中から、何を残していくべきか、また明日に向けてどのように繋いでいったらよいかについて、考えていきたいです。以上長丁場で 3 時間を超えると思いますが、企画サイドとして面白い内容と思えましたので、ぜひ最後までお聞きいただければと思います。

## 1. 開会挨拶・趣旨

### 1-2. 主催者開会挨拶（田中一雄）



田中一雄：WDO 世界デザイン会議東京 2023 実行委員長／株式会社 GK デザイン機構代表取締役社長／前 JIDA 理事長

皆さんこんにちは、GK デザイン機構の田中でございます。WDO 世界デザイン会議東京 2023 の実行委員長を務めております。ICSID のボード（理事）は 2007 年から 11 年まで 2 期 4 年間やりました。それ以前には私のポストであった榮久庵憲司がプレジデント（会長）をやり、1973 年京都会議の実行委員長を務めたということが背景にあったわけです。その後 1989 年に名古屋会議、今回 34 年ぶり 3 回目の日本開催ということになります。

青木さんと一緒に、本日のテーマ「残したものは、  
「残」なのか「遺」なのか、どっちなんだとずいぶん悩んだわけです。でも、今考えると両方あるだろうと思うわけです。会議そのものの意味合いとして残したものと、会議の後に日本に遺されたもの、その両方があると思います。

73 年のテーマは“Soul and Material Things”で「人の心と物の世界」、あとで黒田さんがご説明してくださいと思います。文化人類学の梅棹忠夫先生が基調講演をされました。そして、89 年は“Emerging Landscape”というテーマで「かたちの新風景」が言われたわけです。この二つともそれぞれの時代に意味あるテーマだったと思いますが、この 50 年間でデザインの意味は大きく変わってきました。特に近年は大きく変わっています。

従来の造形を中心としたデザインの重要性は決して消えるものではなく、延々と続くものではありません。ただ、英語で言う意味合いのデザイン、例えばジェットエンジンのデザインとかダムデザインのデザインという言い

方をしますが、そうしたエンジニアリングベースでのデザインということ、あるいはプランニングベースでのデザインということ、そうした広がりをも今世界中が持ってきています。日本もこのような影響下にあると思います。

その上で、今度のテーマは「Design Beyond」、次なるデザインはどこに行くのかということを考えてようとしているわけです。プログラムの詳細については、後半で事務局長の津村真紀子さんからご説明があると思いますが、テーマ的なことだけ簡単に説明させていただきたいと思います。会議自体には、「Humanity」「Planet」「Technology」「Policy」という四つのサブテーマを設けています。そして、キーノートスピーチ（基調講演）は「Humanity」「Planet」「Technology」の三つを準備しています。

今私たちはどういう時代に生きているかということです。今日の東京は暑いねということはありませんけれども、東北の一部では壊滅的な集中豪雨に見舞われています。これまでは、九州で起きる現象だった大雨が、今東北で起きているわけです。結局は、温暖化に起因する気候変動が、日本に限らず世界各地でさまざまな激甚災害を起こしています。

この気候変動によって、2029 年までに最大 420 兆円という莫大な経済損失が起こればこの前新聞に出ていました。単純にロマンチックな話で北極熊が溺れるとか、そういう話だけではないわけです。気候変動に伴う社会の大きな変化は避けて通れません。また、その一方でいろいろなことが起きています。ウクライナでは 21 世紀に起こらないと思われていた戦争も起きています。これを見て、人間はいまだに愚かだったということに認識しているわけです。

もう一つはテクノロジー、特にデジタルですね。もっと言えば AI が今大きく社会を変えつつあります。それに伴いデザインの役割も変わっていています。まさに AI が人間にとって変わる部分がたくさん出てくるわけですが、そうしたときに人間は何をするのかが、大きくクローズアップされてくると思います。私は、プロジェクトの最上流領域で何を与件とするべきかというプランニングの世界と、最後に何を選ぶべきかというジャッジの世界は、当面今後も人間の司る部分だろうと思っています。そのあいだのプロセスにつ

いては、AIにとって変わる部分は非常に多くあるだろうと考えています。

もちろん人間との共同ワークも起きてくるわけですが、そうしたAIと人間の関係、あるいはデジタル化に伴う人間の暮らし方の変化が、これからいろいろなところで起こってきます。いや、既に起きているといえます。その中で、デザインはどこに行くのかということを考えていく必要があります。

そのときに、人新世（じんしんせい）とも言われる先ほど言ったプラネットの問題と、AIに象徴されるテクノロジーの問題の上に、人間自身の本来の人間性とは何かが問われてくると思います。

翻ってみれば、“Soul and Material Things”が1973年の会議のテーマであったことには、先見の明を感じます。「心」という言葉は非常に曖昧かつ抽象的でつかみどころがないところがあるのですが、今私たちがAIと相対したときに、心にもう一度帰ってくると思っています。京都會議のときに非常に崇高な哲学的なテーマの中で語られたことが、50年を経て、今、現実的なデザインのインプリメンテーション（社会実装）の中で起きてくる。そのとき人間は何をすべきなのかを、私たちは考えていかなければなりません。2023年という今は、そうした地点なのです。

このようなことを、今年の10月27日、28日、29日の3日間の世界デザイン会議、メイン会議は28日の一日ですが、その中で語り尽くせるかということ、とても語り尽くせないだろうと思います。ただ、それを一つのきっかけとして、デザインというもののディフィニションも、さらに変わっていくでしょう。それと同時に、これからのデザインというもののアクティビティも変わっていくはずです。私たちは今、そうした節目に立っているのだと思います。

このような今年の会議の立ち位置を確認する中で、本日、過去の会議をもう一度振り返るということは、非常に意味のあることだと思っております。私自身大変期待をしているところです。本日も登壇の皆さまの議論を楽しみに聞かせていただきたいと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

## 2. 1973年と1989年、

### ICSID 会議とデザイナー運動の概要（黒田宏治）



黒田宏治：デザイン振興政策アーカイブ・プロジェクト／静岡文化芸術大学 名誉教授

#### ●世界デザイン会議と ICSID、WDO

ご紹介いただきました黒田でございます。本日のテーマの中心になってきます1973年と1989年、ICSIDのデザイン会議とデザイナーについては、ご経験の方はご承知のことと思います。ただ、本日は当時を知らない新しい世代の方もいらっしゃると思いますので、またかなり旧聞に属することでもありますので、概略をご説明したいと思います。

まず、日本で開催されてきた世界デザイン会議はどれだけあるかを確認したいと思います。古い方から順番にいうと、まず1960年の世界デザイン会議。デザイン史の分野では、World Design Conferenceの略で「WoDeCo」と言われておりますが、戦後復興間もない時期に建築関係中心のデザイン会議が東京でありました。

1973年には、先ほどから話題に出ている ICSID の京都会議、世界インダストリアルデザイン会議 ICSID '73 KYOTO が開催されました。1989年に名古屋で世界デザイン会議 ICSID '89 NAGOYA が開かれます。その後、国際的なデザイン団体は世界にいくつかありますが、1995年には IFI\*1主催の世界インテリアデザイン会議 (IFI' 95 NAGOYA)、それから2003年にグラフィック関係の国際団体 Icograda\*2 主催で世界グラフィックデザイン会議 (2003 Icograda Congress NAGOYA) がありました。いずれも開催都市は名古屋です。

ここまでで、日本で開催された世界デザイン会議は

過去に5回あったとされています。デザインの捉え方は幅がありますので、見方によってはこれ以外の国際的なデザイン会議もあったかもしれませんが、通常はこのくらいが数えられてきます。そして、今年の秋に WDO 世界デザイン会議、World Design Assembly TOKYO 2023 が東京で開催される予定です。

\*1：IFI（インテリア関係の団体、The International Federation of Interior Architects/Designers：国際インテリアアーキテクト／デザイナー団体連合

\*2：Icograda（International Council of Graphic Design Associations：国際グラフィックデザイン団体協議会）

この中で、何故73年と89年のデザイン会議を取り上げるのかということ、先ほどの青木さん、田中さんのお話にもありましたが、73年の ICSID の世界インダストリアルデザイン会議と89年の ICSID の世界デザイン会議、この2つが今回の WDO 会議の流れの系譜であるということが1点。それからこの2つの年に関しましては、通産省の主導でデザイナーというデザインの国民運動的な動きが展開されたという共通性もあること、それがもう1点です。そこで、今回この2つを取り上げて、この秋の WDO 会議に先立ち、それらの意義や残したものを議論していくかたちになるかと思えます。

ここまでで、何となく ICSID とか WDO と言ってきてしまいましたが、少し解説が必要ですね。ICSID は International Council of Societies of Industrial



図 2-1 日本開催の世界デザイン会議

Design の略で「国際インダストリアルデザイン団体協議会」と訳されます。1957年に、インダストリアルデザインの重要性について話し合うために、国際会議体として欧州の団体を中心に設立されました。日本からは JIDA（日本インダストリアルデザイナー協会、当時）がアジア唯一の創立会員として参加しています。

設立以来、2年に1回世界会議を各都市で——欧州が中心ですけれども——開催してきており、73年にアジアで初めて京都で開かれました。それから89年に第16回の世界会議が名古屋で開かれました。90年代、2000年代を経て、最近では2015年に韓国の光州、17年にイタリアのトリノ。この年に ICSID が WDO（World Design Organization）に名称変更となります。それから19年にインドのハイデラバード、21年はコロナの関係でオンライン開催。そして、今年の東京会議につながってくるわけです。

### ICSIDとWDO、概要と変遷

**ICSID : International Council of Societies of Industrial Design**

1957年 インダストリアルデザインの重要性について話し合うための国際会議体として設立。欧州の団体が中心、JIDAはアジアからの唯一の創立会員。

1959年 第1回世界会議（ストックホルム）First Congress \*17カ国23団体参加

1961年 第2回世界会議（ベネチア）Towards an Aesthetic of the Invisible Design of Tradition

1963年 第3回世界会議（パリ）Industrial design - Unifying Factors

....

1973年 第8回世界会議（京都）Soul and Material Things \*アジア初の開催

....

1989年 第16回世界会議（名古屋）The Emerging Landscape : Order and Aesthetics in the Information Age

....



図 2-2a ICSID と WDO、概要と変遷 (1)

### ICSIDとWDO、概要と変遷

2015年 第29回世界会議（光州/韓国）Design Connects \*団体名称変更を決議

2017年 第30回世界会議（トリノ）Achieving the SDGs by Design  
\*ICSIDからWDOに名称変更（2017年）

2019年 第31回世界会議（ハイデラバード/インド）Humanizing Design

2021年 第32回世界会議（online）Design for the unimagined

2023年 第33回世界会議（東京）Design Beyond 新しい世界のためのデザイン

**WDO : World Design Organization**

会員は世界34カ国・地域、180団体以上

日本からは、日本インダストリアルデザイン協会、日本デザイン振興会、国際デザインセンター 千葉大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学 が加盟。

Design for a better world



図 2-2b ICSID と WDO、概要と変遷 (2)

WDO については後ほど詳しく説明があると思いますが、現在、世界 34 カ国・地域で 180 以上の団体が加盟しております。日本からは、日本インダストリアルデザイン協会（JIDA）、日本デザイン振興会、名古

屋の国際デザインセンターに加え、3つの大学、千葉大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学が会員になっています。“Design for a better world”、幅広くデザインを捉えて世界にいかんデザインが貢献していけるかを趣旨に活動を続けています。

### ●ICSID'73KYOTO と'73 デザインイヤー

世界インダストリアルデザイン会議 ICSID '73 KYOTO はどんな会議だったのか。まず、当時のポスターからご覧いただこうと思います。左が ICSID 京都会議のポスター、永井一正のデザイン、右がデザインイヤーのポスターで、亀倉雄策のデザインになります（図 2-3）。



図 2-3 73 京都会議と 73 デザインイヤーのポスター

主催は、デザイン団体を中心として産業界・行政で組織された世界インダストリアルデザイン会議運営委員会。委員長は野見山勉、当時ジェトロの副理事長です。その下で、会議の実行委員会（委員長：柴久庵憲司）が企画・運営を担うかたちでした。会期・会場は、1973年10月11日から13日の3日間、国立京都国際会館で公開の会議が開かれました。

テーマは「人の心と物の世界/Soul and Material Things」。基調講演は梅棹忠夫（文化人類学）。参加者は、38カ国・地域で2,245名、海外から400名以上。それまでの ICSID の国際会議の中では最大規模の会議になったと聞いています。

会議の構成には工夫がこらされていました。会議場における会議をコンGRESS・ホールという言い方をしましたが、会議場周辺の広場で参加者が自由に歓談できる場をコンプレックス・プラザ、そして参加者が京都の街に繰り出して市民と交流を図ろうというコンGRESS・シティを設け、オープンな会議場にとどまらない会議展開をしてみました。

コンGRESS・プラザでは FM 放送局も開催され、コ

ングレス・シティでは自転車に乗って街に繰り出すという、そんな流れがありました。そして、このような世界インダストリアルデザイン会議を軸にして、デザインイヤーという大きな土俵がつけられました。さかのぼれば、日本開催は65年のICSIDウィーン会議で立候補して、69年のロンドン会議で決まって、73年に開催ですから、足かけ10年ぐらいかかって開催にこぎつけたという経緯です。

72年の通産省のデザイン奨励審議会答申の中でこれを核にしたデザインイヤー、大きなデザインプロモーションの土俵をつくって幅広く運動的に展開しようとなりました。そこで、デザインイヤー運営会を行政・デザイン界・産業界等で組織して、会長には当時日本商工会議所会頭の永野重雄が就いて、「明日への生活と環境をつくるために、デザインのより深い認識を求める年。あらゆる専門的立場の人々が広く国民的基盤に立ってそれを求める年」と位置付けられました。

一マで、国内8都市で大きなデザイン展が開かれました。それ以外に、民間、デザイン団体、行政等の参加事業は136件にのぼり、1年間で集中して展開されるかたちになりました。展示関係が中心でしたが、ある程度国内に広くデザインの普及啓発が期待されました。

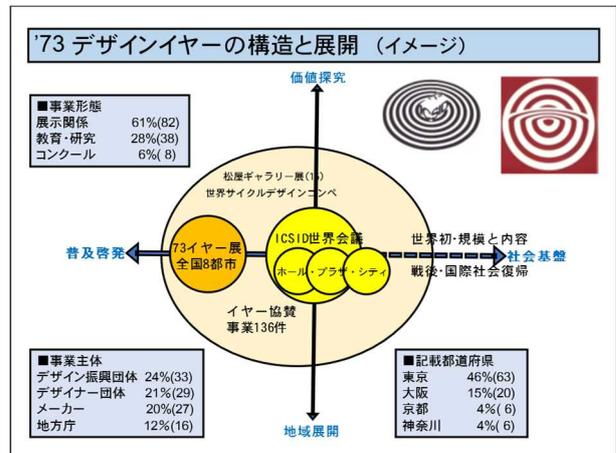


図 2-6 73 デザインイヤーの構造と展開

### 世界インダストリアルデザイン会議 ICSID '73 KYOTO

**主催** 世界インダストリアルデザイン会議運営委員会  
**委員長**：野見山勉 / **実行委員長**：栄久庵憲司

**会期/会場** 1973.10.11-13 国立京都国際会館 (京都市)

**テーマ** 人の心と物の世界 Soul and Material Things

**会議構成** コングレスホール (会議場における討議・講演)  
 講演 (7) 基調講演梅村忠雄 (文化人類学)  
 分科会 (24) 自然・人間・社会・文化各3分科会等 (講師等129名)  
 コングレス・プラザ (参加者の多角的な交流)  
 プラザ・テント、ICSID BOX、VOD、おいでやす  
 コングレス・シティ (街全体が会場) サイクリング・シティ

**参加者** 38カ国・地域2,245人 (海外448名)



図 2-4 ICSID'73KYOTO の概要

### ICSID '73 KYOTOと'73 デザインイヤー

日本開催立候補 ICSIDウィーン 総会・1965

日本開催内定 ICSIDロンドン 総会・1969

デザイン奨励 審議会答申 1972



**73デザインイヤー (1973.4.1~1974.3.31)**

- 主催 デザインイヤー運営会 (会長：永野重雄)
- デザインイヤーの主旨  
 明日への生活と環境をつくるために、デザインのより深い認識を求める年。あらゆる専門的立場の人々が広く国民的基盤にたつてそれを求める年。
- 世界インダストリアルデザイン会議
- 展示事業「日本人の生活とデザイン」 参加1万人 東京、岡山、高松、名古屋、札幌、仙台、大阪、北九州
- 広報事業  
 デザインオンパレードミニコミデザインなど
- 協賛事業 136件  
 展示関係82件、教育・研究38件、コンクール18件\*など  
 デザイン振興団体3件、デザイナー団体9件など  
 東京63件、大阪20件、京都6件、神奈川16件など  
 \*世界サイクルデザインコンペ、国際陶磁器デザインコンペ など

図 2-5 73 京都会議と 73 デザインイヤーの概要

デザインイヤーのコア事業として、世界インダストリアルデザイン会議京都が位置付けられ、運営会の主催事業としては「日本人の生活とデザイン」というテ

全体像はどのような構図かということ、デザインイヤーという大きな一つの土俵がつけられて、その中心的な事業として ICSID の世界会議があって、さらにイヤー展というかたちで、東京、大阪、札幌等々全国8都市で大きなデザイン展が開かれて、その周辺にデザイン団体、自治体、企業等の展覧会、コンペティション、セミナー等 (協賛事業) が136件の実施が位置づけられるかたちです。

この会議自体は、当時のデザインの分野でいうと、世界最大の規模と内容を持った国際会議であり、戦後日本が国際社会に復帰する大きな節目にするというのが、デザイン界の理解であり、目指すところであったと言えるでしょう。そういう意味で、デザイン界だけのイベントではなく、1964年東京オリンピック、1970年大阪万博という大きな戦後復興の最終章に位置づけられる国際会議だったと言えると思います。

ただ、協賛事業は、展覧会が中心でしたが、東京圏でデザイン団体主催のものが多く、幅広く一般の国民、産業界の方にまで情報が届いたとは言え切れず、デザイン業界、ないしその周辺での広がりには留まったというのが、当時のデザインイヤー事業の実態ではなかったかとは思いますが。

いずれにせよ、単に一つの国際会議が開かれたということではなく、会議を契機にして1年間集中的にデザインに関する様々な催しを展開することで、デザインの裾野を広げようとする第一歩を踏み出したと言えるのと、そんなふうと考えております。

## ●ICSID'89NAGOYA と'89 デザインイヤー

続いて 1989 年の世界デザイン会議、デザインイヤーについてです。まずは当時のポスターをご覧ください、古株の方は記憶を呼び戻していただけたらと思います。左は岡本茂夫のデザインの ICSID 名古屋会議のポスター、右が亀倉雄策のデザインしたデザインイヤーのポスターになります (図 2-7)。



図 2-7 89 名古屋介護と 89 デザインイヤーのポスター

### 世界デザイン会議 ICSID '89 NAGOYA

**主催** 世界デザイン会議運営会  
 会長：竹田弘太郎／実行委員長：諸星和夫

**会期/会場** 1989.10.17-21／白鳥センチュリープラザ（名古屋市中区）

**テーマ** かたちの新風景—情報化時代のデザイン  
 Emerging Landscape—Order and Aesthetics in the Information Age

**会議構成** 基調講演 ライアル・ワトソン（生物学）  
 分科会：(7-プラネット等)0、全体会議（講師等55名）

**関連事業** 世界のグレートデザイン展、市民フォーラム ICSID インター  
 デザイン展示、デザイン・ザ・フューチャー展

**ブレ事業** パソコン通信会議、映像サービス、協賛テレビ番組

**参加者** 46カ国・地域3,764人（海外857人）





図 2-8 ICSID'89NAGOYA の概要

### 世界デザイン会議と'89 デザインイヤー

名古屋誘致  
ICSID ワシントン  
総会1985

↓

世界デザイン  
博覧会決定  
1986

↓

デザイン奨励  
審議会答申  
1988

↓



**'89 デザインイヤー (1989.4.1~1990.3.31)**

- 主催 '89 デザインイヤーフォーラム (会 石川六郎)
- 運動展開の骨格 デザインを通じて・・・
- ①国民生活の質的向上 ②地域活性化を図る
- ③産業の高度化を図る ④国際社会に貢献する
- フォーラム事業
  - ・日本デザイン賞 (大賞：ファクシヨほか)
  - ・デザインワークショップ (全国地域)
  - ・青少年デザイン提案コンクール
- 参加事業 401件
  - \* 中核的事業 世界デザイン会議
  - \* 中核的事業 世界デザイン博覧会
- 参加者総数 約2,200万人
  - ・世界デザイン博覧会 1,518万人
  - ・会議、セミナー、シンポ等4万人
- 総事業費 約540億円
  - \* 環境開発、建設等含めると約500億円

図 2-9 89 名古屋会議と 89 デザインイヤーの概要

まず注目してほしいのは、73 年は世界インダストリアルデザイン会議でしたが、89 年は世界デザイン会議という名称に変わっています。「インダストリアル」が外れて、デザインの領域の壁を取り払ったというのが、名称としても内容としても、前回会議からの大きな変更点になります。

89 年の世界デザイン会議は、デザイン界を中心に産業界・行政を巻き込んで世界デザイン会議運営会を組織して実施されました。会長は当時名古屋商工会議所会頭の竹田弘太郎、そして実行委員長は諸星和夫、後ほど登場いたします。1989 年 10 月 17 日から 21 日、名古屋国際会議場（白鳥センチュリープラザ）などで展開されました。「Emerging Landscape かたちの新風景——情報化時代のデザイン」というテーマで行われました。

基調講演はライアル・ワトソン（生物学）。「テーマ領域は 7 つのプラネット」という言い方をしましたが、分科会が 30、全体会議を含めて講師等は 155 名という、かなり大きな国際会議になったかなと思います。46 カ国・地域 3,764 人、海外から 800 人以上の参加者がありました。関連事業として世界のグレートデザイン展、市民フォーラム等も繰り広げられ、景気状況もありますが、かなり華やかな会議ではなかったかなと思います。

85 年に ICSID のワシントンでの総会で名古屋誘致が決定。それを踏まえて、名古屋市で世界デザイン博覧会の開催を翌年に決定。この 2 つのベースを持って通産省に働きかけて、デザイン奨励審議会答申の中で 89 年のデザインイヤーを提言されて、89 年度がデザインイヤーになりました。期間は 89 年 4 月から 90 年 3 月まで。

'89 デザインイヤーフォーラムという主催団体が組織され、会長は石川六郎日本商工会議所会頭が就いて、デザイン界だけでなく産業界・行政あげての大きな土俵づくりになっていきました。国民生活の質的向上、地域の活性化を図る、産業の高度化を図る、国際社会に貢献するといった骨格の下で、日本デザイン賞とか、各地域でワークショップが展開され、参加事業として世界デザイン会議、世界デザイン博覧会はもちろんのこと、401 件の事業が全国津々浦々で展開されて、参加者総数約 2,200 万人と言われております。

この全体の構図はどうなっていたかということ、理論的・精神的なコアとして ICSID の世界デザイン会議が位置づけられます。そして、名古屋市内ではいくつかの関連事業があって、さらにそれを市民レベルまで広げる世界デザイン博覧会があって、名古屋市のデザイン都市行政といったフレームづくりに展開するような流れが一つありました。

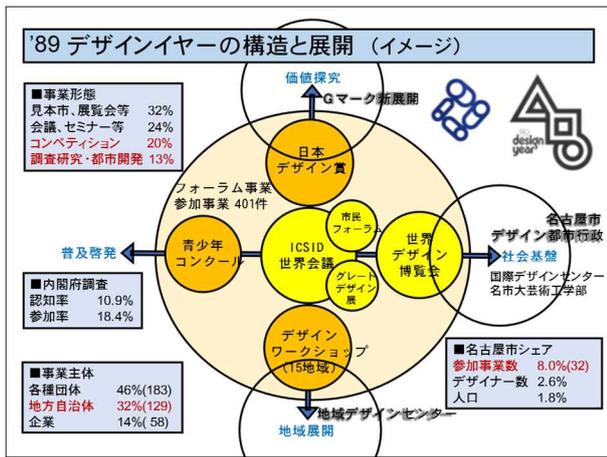


図 2-10 '89 デザイナーの構造と展開

それから、日本デザイン賞という、グッドデザイン賞を大きくしたような顕彰事業がありました。新しいデザインの価値を導入する、そんな役割を果たしたのではないかと思います。大賞は4件選ばれました。どのメーカーの製品というのではなく「ファクシミリ」という情報通信の装置、「瀬戸大橋(児玉・坂出ルート)」、「沖縄自然冷房住宅」、「横浜市の都市デザイン行政」です。従来の目に見える、物の姿形のデザインを超えたデザインの価値を、ここで提示したように思います。それが後々の G マークを含めてデザイン価値の広がりを用意したのかなと思います。

他にも、デザインワークショップが国内 15 地域でおこなわれ、地域でのデザインの実践的な活動ですね。これらが後々各地域でのデザイン振興の活動につながっていきます。また、参加事業も展覧会、会議・セミナーに加えコンペ、都市開発など多彩であり、全国各地の自治体主催事業も多く、幅広い年代層、市民、国民、産業界にデザインの普及啓発がおこなわれました。

当時の新聞記事の状況を見ていきますと、明らかにこの年はデザインをめぐっての新聞報道が増えています。そして、この年を境に、それ以前と比べるとデザインの話題が紙面で豊かになっているという意味で、幅広いプロモーション効果を発揮することができたのではないかと考えております。この辺りは、後ほど当事者の方の発言が聞けると思います。

### ●デザイン振興政策アーカイブ

この辺りがデザイン会議、デザイナーの概要ですが、私どもの活動で、「デザイン振興政策アーカイブ」という、ウェブでデザイン政策関連の情報の収集・公開をしております\*3。本日お手元には、「世界インダストリアルデザイン会議 ICSID '73 KYOTO の開催について」という企画書と、世界デザイン会議 ICSID '89 NAGOYA のパンフレットのコピーを、それぞれの概

要を理解いただけるよう用意しました(図 2-11)\*4。こういった資料も含めて、デザイナー、デザイン会議、さらにはデザイン奨励審議会の答申など、関連する資料がいろいろと集約されております。

\*3 デザイン振興政策アーカイブ <https://design-archives.jp/>

\*4 デザイン振興政策アーカイブの「研究フォーラム」コーナーの中のシンポジウム 2023.07.10 に掲載されている。

73 年の京都会議、デザイナーの関係は、一応ここでは6件、89 年の名古屋会議、デザイナーの関係は、企画書、ニュースレター、公式記録を含めて7件ほど、本日は紹介させていただきます(図 2-12)。他にも数々の資料が収録されておりますので、ご関心の向きはアーカイブのサイトの方をご覧くださいと思います。

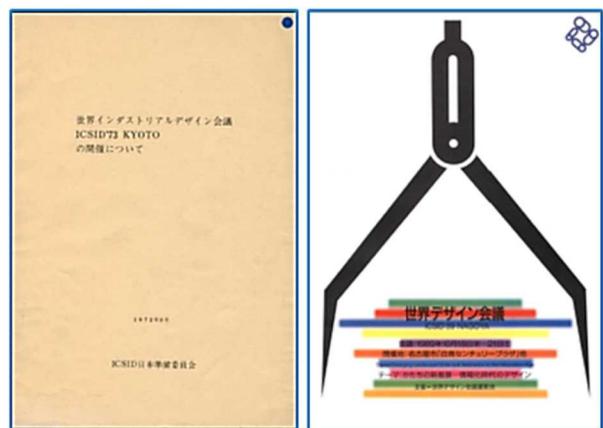


図 2-11 73 京都会議企画書と 89 名古屋会議パンフ

デザイン振興政策アーカイブ収録の主な資料 <https://designarchives.jp/>

- ICSID '73 KYOTO と73デザイナーの関連**  
 「デザイン奨励審議会中間答申 -70年代のデザイン振興政策のあり方-」デザイン奨励審議会、1972年  
 「世界インダストリアルデザイン会議 ICSID '73 KYOTO の開催について」ICSID 日本準備委員会、1972年  
 「73 Design Year NEWS 2-12」デザイナー・運営会、1973~1974年 (1号欠)  
 「ICSID '73 KYOTO 世界インダストリアルデザイン会議世界インダストリアルデザイン会議組織委員会、1973年  
 「73デザイナー報告書」デザイナー・運営会、1974年  
 「世界インダストリアルデザイン会議報告書」世界インダストリアルデザイン会議実行委員会、1974年
- ICSID '89 NAGOYA と89デザイナーの関連**  
 「世界デザイン会議 ICSID '89 NAGOYA 基本構想」世界デザイン会議開催準備委員会、1987年  
 「1990年代のデザイン政策」通商産業省貿易局編、1988年  
 「89デザイナー基本構想」デザイナーフォーラム事務局、1988年  
 「89 DESIGN YEAR NEWS 1-12」(財)日本産業デザイン振興会、1988~1990年  
 「89デザイナー参加事業一覧」89デザイナーフォーラム事務局、1990年  
 「世界デザイン会議 ICSID '89 NAGOYA」世界デザイン会議運営会、1989年  
 「89デザイナー報告書」89デザイナーフォーラム事務局、1990年  
 「世界デザイン会議報告書」世界デザイン会議運営会、1990年

図 2-12 1973/1989 の会議・イヤー関係の主な資料

それから、文書資料ではなかなか掴みきれない歴史的事象もありますので、関係者・当事者に対しておこなったインタビュー記録もアーカイブには収録しております。特に本日のテーマの関係では、木村一男インタビュー記録があります。彼は73年、89年の世界会議の実行委員会の一翼を担ってきた方です。彼のイン

タビュールを通じて、当事者でなければなかなかわからない当時の経緯なども明らかになっています。実は大阪万博が終わってすぐに京都会議をやりようと思っていたとか、デザインイヤーの話は比較的早い時期からあったとか、なるほどと知らされる部分があります。

本日、「1973/1989 ICSID 会議と Design Year が残したもの」ということで、このあとすぐに藤本さん、諸星さん、山村さん、西野さんから、当時の記憶、経験をたどりながら、どういったことをやってきたのか、どういった意義があったのか、どういったものがそのあとと生きているのか、そのようなお話が聞けるかなと思います。以上、前段になりますけれども、会議とイヤーに関して概要の話をさせていただきました。どうもありがとうございます。

青木 黒田さん、ありがとうございました。すみません、89年の構造図に戻れますか（→図 2-10）。この図でいきますと、中心から右のほうの軸を中心に、この後の皆さまにはお話をいただきたいと思います。ICSID の世界デザイン会議、そして世界デザイン博覧会、こうしたことを中心とする名古屋地域の——名古屋だけではなく、中部圏にも広がると思いますが、その動きを少しフォーカシングしてみたいと思います。

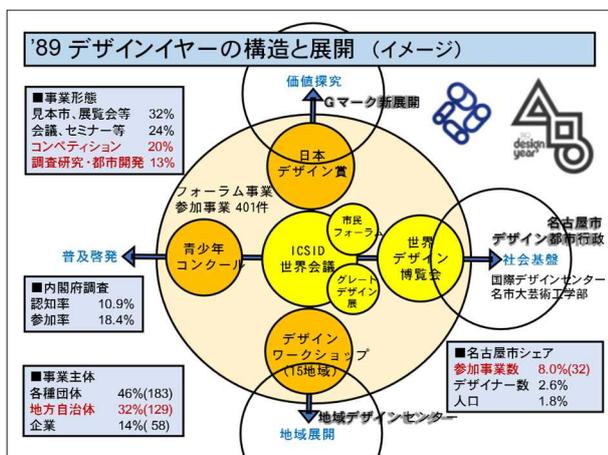


図 2-10 (再掲) '89 デザインイヤーの構造と展開

デザインイヤーに関してですが、私・青木は'89 デザインイヤーフォーラムの事務局のアンカー役を務めておりました。ただ、デザインイヤーがスタートした段階では、名古屋関係の主要事業は仕込みが終わっている状態でしたので、当時私自身としては、直接の接点も少なく、よろしく願いますという挨拶に行っただけしか実は記憶はありません。

デザインイヤーの企画運営としてやっていたのは、省庁関係の調整、特に通産と建設とのブリッジの問題、それから都道府県・主要都市との連携の問題、これが

一番大きな仕事だったと思います。それからデザインイヤー全体の広報関係になりますでしょうか、慣れない広告代理店との渉外にはずいぶんと苦勞した思い出があります。

いずれにしても、デザインの概念と土俵を広げると言うのでしょうか、結果的には土木も都市計画も、それから市民運動もというかたちで、デザインイヤーを境にデザインの枠を広げることができたと考えています。このデザインイヤーに関する話は、アーカイブにも掲載しておりますので、ここでは仔細は省きます。それでは、名古屋での動きを中心にこれからラウンド・テーブルを開催していきたいと思います。黒田さん、どうもありがとうございました。

### 3. ラウンド・テーブル「1989 名古屋デザイン会議への里程」

#### 3-1. 地域・日本・国際をデザインでつなぐ (藤本清春)



藤本清春：道具学会 会長／元 株式会社 GK デザイン  
機構 副社長

**青木** それでは、ラウンド・テーブルを開始したいと思います。ここでは、1989年の名古屋にフォーカスして、当時ご活躍いただいた方々に直接お話をお伺いしようと考えました。青木が聞き役になりまして、ご質問をしていきながらお答えいただくかたちを考えております。

最初の登場は藤本清春さんです。藤本さんは GK デザイン機構の副社長をなさいまして、現在は道具学会の会長をなさっています。89年当時、榮久庵憲司さんとともに世界デザイン会議の企画を推進されました。デザイン会議だけでなく、名古屋市のデザイン都市行政全般についての、コンサルティングをご担当になりました。いわば GK から名古屋に派遣されたプロデューサーのようなポジションかと思います。

#### ●WoDeCo から ICSID 会議へ

**青木** 最初の質問です。事前の打ち合わせでは、89年だけ見ていると駄目だと。1960年の世界デザイン会議でメタボリズムが提唱されていく話、それから73年を経て、89年に至る30年間にわたる一つの流れの中で考えていかななくてはならないんだとおっしゃっていました。まずその辺りから少しお話をいただければと思います。

**藤本** ありがとうございます。藤本清春でございます。今、黒田さんが大変客観的に、グラフィカルに時代をまとめていただきました。彼の大きな歴史の地図の中

で、私の気がついた特徴的なところをお話ししたいと思います。

まず、戦後の復興と高度成長という波をかき分けてきた日本の歴史の中でデザイン振興の歴史を語るときに、はじめに1960年のWoDeCo [World Design Conference] ありきというのを、私は改めて強く認識いたしましたところ です。

私は、生まれは東京ですが、いろいろな地方で育ちまして、小学校6年生の夏に父の関係で名古屋に転校しました。1カ月後に伊勢湾台風があって、5千人ほどの方が亡くなり、私が当時通っていた陽明小学校も大被害を受けました。それが名古屋との初めての出会いになります。翌年、汐路中学校1年のときにWoDeCo 1960 世界デザイン会議があったということ、実は大人になって知ることになります。その後、1989年の名古屋会議等のお手伝いをするようになりましたが、私の中学の同級生が当時の西尾武善市長の秘書になっていたという偶然もあり、いろいろなかたちで旧交を温めることができました。

WoDeCo 1960 が、今青木さんがおっしゃったように、メタボリズム宣言を出したわけです。そのメタボリズムのチームは、当時の若き建築家たちを中心にいろいろなデザイナーも参加しておりました。末席に榮久庵憲司もデザイナーとして参加しておりました。1960年から1970年、この10年のディケイドは、日本のデザインが日本の復興、高度成長に向けて大きな役割を担ってきた10年間であります。

結局、メタボリズムのグループの方々を中心になって、1970年の大阪万博のいろいろな構想を練ったり、その間の1964年には初めての東京オリンピックもありました。大阪万博が象徴的ですが、この60年代の10年間というのは日本の復興と高度成長にとって大変重要な時期であり、かつデザインの振興、デザイン行政を地域と国と一体になってやっていく大きな原点があったと考えます。

ICSIDの世界デザイン会議は、ヨーロッパにある意味で貴族的なソサエティがあり、そこで始められたものであり、それをずっと継承してきたようなところがありました。後にアメリカがどんどん力を出してきますが、ヨーロッパの非常に大きなリーダーシップの中にあり、アジア、アフリカ、今日のグローバルサウス

などはほとんど認識がなかった時代です。そこに、榮久庵憲司が JIDA の理事長になり\*1、国際関係の中で頭角を出すようになり、「暴れん坊の孫悟空がヨーロッパに行って、怒られながら、いじめられながら、楽しんできたんだよ、藤本くん」、そんなことを言っていた時期もありました。

それに対して、日本のデザイン界、産業界、行政など、いろいろなところのバックアップがあって、ついに 1973 年に誘致をすることができるわけです。先ほどのお話にあったように、テーマは“Soul and Material Things”「人の心と物の世界」。そして梅棹忠夫さんの基調講演はまさにユニークで、「日本文明はクジラである。あれは魚ではなくて哺乳類なんだ、間違えてはいけないよ」という話をされました\*2。

心、魂、そして東洋的なもの、それから榮久庵憲司の基本的な個性も含めて、日本というもの、あるいは日本文化、さらにはそのバックボーンにある東洋文化が表象される ICSID 京都会議になりました。東京で ICSID の総会をやりますが、大きなコンGRESSは京都でやりました。それを京都の方々がどのように思ったかはあとから考えればいいと思いますが、ICSID の 73 年の京都会議のテーマと内容の中で、日本を非常にアピールできたということで、73 年の ICSID 会議は大変意味があったのではないかと思います。

私は GK に入って 1 年も経たないうちに、当時浜松町の会議事務局で木村一男さんのところにお世話になって、下働きをずっといたしまして、そのまま 73 年の終わりまで ICSID 会議開催の仕事をしていただきました\*3。25、26 歳ぐらいのときに経験した ICSID のある意味原形みたいなものが、私の中には醸成されていたように思います。

### ●1989 年のデザイン会議とデザイン博覧会

**藤本** それから 10 数年を経て 89 年に名古屋会議をやるにあたって、しかもそこにデザインイヤーというムーブメントが大きく絡んでくる構図の中で、地域と日本と国際をデザインにおいてどうつなげられるかという問題認識で臨みました。京都会議で原形を知り、教えてもらいながら、名古屋および中部地域、そして全国に、世界に伝えるためにはどうしたらいいか、時代を越えて考えられたことは、大変私自身にとってもよかったです、自分の人生を振り返って思います。

世界デザイン博覧会は、単に大きな展示会というのではなくて、博覧会というかたちをつくることができました。それからデザインイヤーそのものも、京都の時代とは違う広がりをもつことができました。さらに、名古屋市では 1989 年にデザイン都市宣言が出されておりましたが、ポスト博覧会、ポスト会議ということ

で、そこに国際デザインセンターがしっかりとつくられていきました。

**青木** 今思い出しましたが、72 年に藤本さんがデザイン会議の事務局にいらっしゃって、私はすぐ隣の場所（日本産業デザイン振興会）におりました。そのとき以来のお付き合いになります。50 年になります。

73 年のデザイン会議については、私には「うん？」という部分がありました。一つは、梅棹忠夫さんのクジラ論は、はっきり言えば脱亜入欧だろうというふうに読んだので、これはないだろうというような感じはしておりました。ただ、デザイナーの盛り上がりとかそういうのは非常に健全なものだということを、すごく理解をしました。

今藤本さんがおっしゃった中で、ずっとテーマになっているのは、地域、日本、国際をデザインでつないでいくという部分だと思います。多分この部分が、73 年、89 年、そして今日につながる課題でもあるのだろうと思いました。

次に、89 年、藤本さんの活動はやや裏方のような感じなのですが、具体的にどのような活動をなさっていたのでしょうか、エピソード的にお話しただけないでしょうか。

**藤本** 私は 89 年の ICSID のデザイン会議では実行委員会の広報委員長という役で、国内外に対しての事前の広報だけではなくて、開催に向けて実際の宣伝活動をしたり、プロモーション活動のいろいろな仕掛けをつくったりしたというのが、会議の実行委員、広報委員長としてのスタンスです。一方、デザイン博覧会に関しては、榮久庵憲司が総合プロデューサーでしたから、その補佐役をやったわけです。

何で博覧会になったかというエピソードがあります。先ほど黒田さんのご紹介にもありましたが、1985 年、つまり 89 年の世界デザイン博覧会の 4 年前にワシントン D.C. でアメリカが主催した ICSID 世界会議がありました。それまでは、ICSID のコンGRESSはずっとほぼコンGRESSだけだったんです。一部、入口にディスプレイがあるくらいでした。それがワシントン D.C. においては、大きな会議場を使って、大博覧会というミニ博覧会をされたのです。

それが大変にプレゼンテーションもよかったし、内容も当時 1985 年における世界国家としてのアメリカのデザインが果たしてきたいろいろな成果とか、未来へ向けての将来展示のようなものがあり、大変に魅力的なものでした。「デザイン」の名称を冠した世界博覧会は今までにはなく、名古屋で世界デザイン会議が開催されちょうどよい機会になるので、日本で初めて「デ

ザイン」が付いた博覧会を名古屋で ICSID の会議と一緒に成立させたい、という榮久庵憲司の夢が広がりました。

それがきっかけで、地元名古屋の方々、それから日本のいろいろな関係の方々も含めて協力をしていただいて、開催への運びとなりました。ワシントンから始まった4年間ぐらいの地道な ICSID 会議そのものの構成、それに加えて博覧会というもう一つの大きなイベントを抱き合わせにして、なんとか相乗効果を持ちながら成立させるというのが、裏方としての私の役目だったということでもあります。

**青木** ワシントンには市役所の方も一緒に行かれて感激されたという話を聞いています。そういうような場面を具体的にご覧になったことで市制百周年事業へとつながっていくという筋になるわけですね。

**藤本** そうですね。1989年に市制百周年業というのは日本中で無茶苦茶たくさんありました。名古屋は当初百周年でなんとかオリンピックをとということがあったのですが、運悪くこけてしまったわけです。それで、オリンピックに代わるぐらいの国際イベントをとという素直なきっかけがありました。中日新聞の方とかいろいろな方々の御協力や御努力があって、私自身としては、会議と博覧会の二足の草鞋を履いたわけではないのですが、一緒にうまくできたわけで、結果としてもいい成果を実現ができたのではないかと考えています。

**青木** 専門家の会議だけでなく、それが具体的に市民を巻き込んだ場をつくっていったところが大きいのかなと思います。それを、プロデュースの立場からご覧になっていたということでしょうか。

#### ●榮久庵憲司とデザインイヤーへの願い

**青木** 最後に質問をしたいのは、榮久庵さんと名古屋市との関係です。あまり合わなかったのではないかと話も聞きますし、なんとなく……、みたいなのところもありました。多分、榮久庵さんとしては、名古屋でやってほしいというか、何かビジョンがあったのだろうなと思います。先ほどの地域、日本、国際の話とつながってくるのではないかと感じはしますが、そこら辺を少しお願いできればと思います。

**藤本** 特別に榮久庵憲司が好きな都市というのは、生まれ故郷くらいしかないでしょう。広島育ちですから広島県人であり、広島市民であり、疎開した福山市とかも含めて。どの人にも原風景というものがありますから、それはそういうものでしょう。

榮久庵憲司は若い頃、戦後ですね、カリフォルニアのアート・センター・カレッジ・オブ・デザインに留学していました。そして、戦前にお父さんはハワイに宣教師として行っていましたから、ずっとバイリンガルで育ってきました。つまり、彼には外国体験が豊富であり、帰国子女というか、バイリンガル以上の国際感覚があったということが前提条件にあります。デザインを始めたときに、仏門をちょっと離れて、東京藝術大学に入り直してという、いろいろな人生を送られた方です。

そこで思ったのは、何をやりたかったかという、仏教をやりたかったのではなくて、自分が持っている日本人の魂というふうなもの、日本人の生き方、長い歴史と伝統のある日本、そして東洋の文化を、国際的に表現し、世界を一種のデザインでつなげたいということがあったと思います。そして、そのときは国際連盟ではなくて国際連合を、彼は兵隊を経験しておりますから両方知っておりますが、駄目だった国際連盟ではなくて、新しい国際連合をデザインの中に組み込んで、インターナショナルなムーブメントにしたいというのが本音だったと思います。

デザインイヤーについて聞いたことがあるのですが、「藤本くん、国連年は知っているよね。毎年やっているでしょう」と言うわけです。〇〇年、〇〇イヤーというのがありますね。その時「デザインイヤーというのはパクリですか」と言ったら怒られました。「国連ですらあれだけやっているんだよ。だから、デザインイヤーというのは世界レベルでやるべきなんだ。そのきっかけになるように日本がちゃんとデザインイヤーというのをやり、国連もやっているように、10年計画、デザインディケイドを日本から発信していければ、それが国連を動かして、世界を動かしていく。そういうふうな私たちで、どこかの都市からで構わないので、そこから出て行ったものが最終的には世界につながればいい」。

国連デザインイヤーというのも、当時の国連難民高等弁務官の緒方貞子さんと直接お会いになって、その話もしていました。どの地域からわき出そうと、それが日本国全体のものになり、世界のデザインイヤーになる。多分そういうふうな榮久庵憲司の強い願いがあって、それが実際具体的な私たちで、とりあえず日本列島の中でのデザインイヤーというものが京都、名古屋と順次つながってきたのではないかと理解しております。

**青木** ありがとうございます。またあとで何か少しお話がいただければと思います。

\*1：栄久庵憲司は 1970-75 年 JIDA 理事長、1975-77 年 ICSID 会長、1973 年 ICSID 世界インダストリアルデザイン会議実行委員長を務めた。

\*2：梅棹忠夫は ICSID'73KYOTO の基調講演「人の心と物の世界」の冒頭で次のように語っていた。「今日の日本の文明をささえているものは、よくしらべてみますと、依然として西洋的精神とは、おおくの点でちがっているのであります、しかも、体系的にちがっているのであります、妙なたとえですが、日本はクジラみたいなものだと思うんです。ひろい海の中は、魚の天下であった。魚以外の脊椎動物が、海の中で自由に生活できるとは、魚からすれば想像もできません。」  
（『世界インダストリアルデザイン会議の記録』1975年より）。  
当該部分の小見出しは「日本文明はクジラである」と付されている。

\*3：ICSID'73KYOTO 世界インダストリアルデザイン会議実行委員会の事務局は、1972 年 6 月に東京・浜松町の世界貿易センタービル別館 4 階 JIDA 事務局内に設けられ、木村一男が事務局長を務めていた。当時、同じフロアには日本産業デザイン振興会もオフィスを構えていた。

### 3. ラウンド・テーブル「1989 名古屋デザイン会議への里程」

#### 3-2. デザインの国際化と ICSID 名古屋会議（諸星和夫）



諸星和夫: ICSID 世界デザイン会議 1989 名古屋 実行委員長) / トヨタ自動車株式会社で約 40 年間カーデザインに携わる

##### ●レイモンド・ローウィとの出会い

青木 諸星さんをご紹介したいと思います。トヨタのエースデザイナーをずっと続けられた方です。89年のICSID デザイン会議名古屋の実行委員長を務められました。

諸星さんとも事前にお話をさせていただいたのですが、やはり同じで、60年から90年までの30年間の流れを捉えるのが重要とのことでした。この30年間は、おそらく諸星さんがデザイナーを志して、そして成熟されていく歩みそのものではないかと思います。その辺りをまずお伺いしたいと思います。1960年というのはどういう年でしょうか。

諸星 ご紹介いただきました諸星でございます。自己紹介をしると言われたので、自己紹介を兼ねて、60年頃のお話をまずしたいと思います。

私は最初からデザインというのを仕事にしようと思ったのではなくて、高校時代でしたか面白いことはないかなと思って探していました。レイモンド・ローウィの『口紅から機関車まで』\*1が日本で紹介されましたね。その本を高校生の頃に読んでいて、デザインは金になるんだなと思ったのです。後で知ったのですが、日本専売公社でたばこのピースのデザインについて意見を言ったら、ピースの箱のリ・デザインを依頼され、デザイン料は当時150万円だということです。「えーっ、150万円もデザイン料をもらえるんだ」と驚きました。

それで、学校を探すわけですが、あまり勉強が好きではなかったものですからどうしようかと思っていたら、デザインを教える学科があるということで、千葉大学の工業意匠学科に行きました。そうしたら小池新一先生がいて。小池先生は父方は水戸、母方は会津という血統で、「日本は」というのをものすごく意識しており、当時の日本に対する外国の資料をものすごくたくさん紹介してくださいました。

『工芸ニュース』は、産業工芸試験所、今で言えば日本デザイン振興会のようなところになりますが、そこから出されていて、その本が唯一その当時の世界のデザインの情報を教えてくれる本でした。それまでデザインという名前だけはちょっと知っておりましたが、世界でどんな動きがあるかというのは何も知りませんでした。

デザインは金になるぞと思って千葉大学の工業意匠学科に入ったんですが、世界の話を知らないのかと言われて、そういう文献に目を通すようになりました。レイモンド・ローウィの話しか知りませんでしたから。すると「口紅から機関車まで」どころではなくて、自動車から宇宙船までアメリカではやってるという話が出ていて、「へーっ、宇宙船の話なんてしているのか」と思ったんです。

先ほど WoDeCo の話がありましたが、1959年に私が大学に入って2年目でしたか、60年に開催する WoDeCo のために学生連合というのがつくられました。そのときに、藝大とか、女子美とか、多摩美とか、武蔵美とか、そういうところでデザインをやる学生が集まっているから、おまえも顔を出さないかということで、行って顔を合わせたのが WoDeCo の準備の学生連合でした。WoDeCo で呼ばれた外国人講師を呼んで勉強会をしていました。

WoDeCo は建築の方が中心の会議で。外国から呼ばれた人は超有名な方々で、名前は知っているけれどもどのような仕事をしている人かわかりませんでした。その中に、ブルーノ・ムナーリとか。それからハーバート バイヤー、彼は展覧会をやりました、それからトマス・マルドナド、彼はドイツのウルムからですね、そういう方が来られて原語で何かしゃべるのですが、私には何を言っているかわからないのです。

でも、本物の人が来て、例えばムナーリが来て、今で言うファックスの上で原稿を持ってヒューッと動かしたら、原画がものすごく移動して違うパターンになりますね、これがいいんだよねと言っている。私は、印刷したものをコピーするのがファックスだと思っていたのですが、それを使ってこういうのをやって、これがデザインというんですよ。

そういう実際の人と、その人のやっていることを見た途端に、やっぱりデザインはすごいものなんだなと思ったことを覚えています。それが、小池先生からあっちを見ろ、こっちを見ろと言われていて、実際に外国のデザイナーに会って、その人たちの顔とやっていることを見て聞いた最初のことです。

それから、若手デザイナーが集められてみんな勉強しろと言われていた時代がありました。1960年代でしたか、先頭を切っていたのは小池新二さんで、初めは海外の文献を読めと言っていたのが、今度は人間も呼んでこようということで、通産省の方々は頑張って研修会をやりました。IITのチャップマンとか、アートセンターのアダムスとかが通産省に呼ばれて来ました。ただ、研修会をやった中で、どうも外国というのは行って見ないとわからないということで、経験させられることになったんです。私はIIT(イリノイ工科大学)に派遣入学(1969-70年)の経験もさせていただきました。

### ●グローバル化と実行委員長

**青木** 小池新二先生は九州芸術工科大学創設に携わっていて、初期の段階で日本に海外のデザインを紹介されていた方です。勝負勝さんとはあんまり合わないみたいなのがあったみたいですけど。それから、その時期の問題というのは、日本と国際との向き合い方というのでしょうか、それがずっとテーマになっていくように思います。

それで、諸星さんは89年の実行委員長をなさっています。どういう経緯でしょうか。

**諸星** 多分、私に関わる前には木村一男さんとか先ほどの藤本さんとか、いろいろな準備をされていたと思います。

私は、レイモンド・ローウィではないけれども、当時、車のデザインをやれば儲かるぞということでトヨタ自動車に入社したんですね。それで車のデザインだけをやってきた人間だったんです。

そうしたらある日、1987年6月でしたが、榮久庵憲司さんと、野口瑠璃さんと、豊口協さんと、木村一男さんといった、JIDAのお歴々に呼び出されて、今度名古屋で世界デザイン会議をやるからおまえやらないかと言われたのです。私は自動車しかやったことがな

くて、そういう方面だったら世界につながっているけれども、とてもではないけれどもデザイン会議なんて、と思いました。私は、振興とか伝えるとかいう役割ではなくて、ものをつくるので精一杯でした。

73年の頃は、日本にもデザインがあるんだと一生懸命だったと思うんです。日本が誇ることは、そこに暮らしていた人たちの持っていたクラフトマンのテクノロジーであり、クラフトみたいなものは世界レベルになっていました。しかし、日本が「ここにある」と言わない限り、先ほどの言葉の問題ではないですが、世界には伝わらないんですね。

でも、89年当時は、自動車の生産量は多分世界2位ぐらいになっていたと思いますから、日本人がつくった物は世界各国で相当に使われています。日本の物はかなり世界中に広がりました。そういう時代でした。そういう中で、おまえはそういうのを広げていったのだから、そういう立場で何かやれと言われていたんだなと思いました。1976年からはトヨタのアメリカのデザイン拠点CALTYのゼネラルマネージャーとして派遣されたこともありましたが(1983年帰国)\*2。「技術は普遍的だが物は文化で育つ」ことを体験的に学びました。

それで帰ってきて数年たって、おまえやれと言われてきたような経緯です。榮久庵さんもよく見ていて、榮久庵さんもアートセンターに行っていたから、おまえは米国に行って帰ってきたのだから、ちゃんと勉強してきたこと経験してきたことをまとめろみたいな話をされたのではないかと思います。

国際的な物をつくるということの実際としては、ワールドカーというのがあるのではないかと、当時盛んに言われました。ワールドカーというのはこういうものだ、というのがあると信じたのです。しかし、物が使われる場所には風土があります。その風土に合わなければ駄目なのです。だから、使われることを考える。大量生産、大量消費はいいことではないと最近は言われていますが、多くの人に使ってもらう物というのは、物自体の品質はもちろん重要ですが、その風土に合った内容を出せるかというのが、国際化するときの一つの大変重要なポイントです。ですから、本当に国際的な物があるのかと言われたら、私は物というのは風土に属していると思うので、そこがデザインを始めるときに矛盾でした。

### ●物と心、生命とデザインの風景論

**青木** 次の質問ですが、73年は「物と心」でやっている。ある意味で日本のデザインが未成熟だったから「物と心」と言うしかなかったというニュアンスで受け止めました。89年は、多分日本のデザインが立派になって

しまっている。ジャパン・アズ・ナンバーワンとも言われました。日本がナンバーワンになったときに、実行委員長として何を打ち出そうとお考えになったのでしょうか。

**諸星** 私は、先ほどの話のように、73年の京都はものすごく印象に残っています。そのときの私の受け取りは——物に心があるという言い方は、当時アニミズムだと西洋の連中からばんばん言われました。でも、アニミズムではないというのではなくて、物に心を感じていく、そういう感性というのが東洋にはあるということだと思っんです。しかし、その頃のデザインというのは先進国の世界につながっている話が基準になっていて、そうではないことをつぶやいたのだなという認識を持たれました。

それと先ほど藤本さんのお話で、梅棹忠夫さんの基調講演のクジラ論が話題になりましたが、私はジャン・ボードリアーの特別講演「デザイン・経済学と象徴交換にあいだ」も興味深く思いました。日本の形而上的アプローチと西欧の実利的アプローチの差異が見えたことが心に残っています。

89年の頃は、物ではなくて情報だという話に変化しつつありました。ですから、**Emerging Landscape** と英文字ではなりますが、日本文字では「かたちの新風景」となりますが、これも中途半端でわからないなと言われました。ものづくりで生きる私たちは、こういう風景を見せるしかないと思ったんです。多様な意味内容がデザインという言葉の中にあるのだと。しかも、そこにあるものをできるだけ広く集めてやろうとってプログラムを組みました。

会議のプログラムは、鈴木博之先生と相談して、あだこうだと話をしたのですが、基本的なプログラムのバックグラウンドにあった「生命」というのに対して、「地球の生命」だと言っていたわけです。地球だけの生命なのかというのが問題になります。生命体を安全に、安心して、そういうものを自分たちは提供できるのかというのがデザイナーとしては重要なのだと思いました。それで、基調講演はどうしても生命学的な方がいいなと思いました。結果的にはライアル・ワトソン博士になりました。89年のときは、基本的にはそういうバックグラウンドの中でデザインを考えておかなければならないと私は考えたのです。

**青木** 生命体としての多様性みたいな問題と、先ほどおっしゃっていたワールドカーというのは、ただ無前提的に全部に共通するという話は基本的にないとも言われますが、この部分は共通すると考えていいですよ。

**諸星** ライアル・ワトソンは、これも誤解されているのですが、日・英・仏の通訳レベルが不十分だったと思いますが、いわゆる進化論を例にとりて、突然変異と淘汰、物にもそういうものがある、だから、物も人も環境に沿って変化していく、そういうことを言いたかったんですね。

だから、こういうのが正しいとか、こういうのであるべきだと言い切ってしまうのは、それはそれで正しい場合もあります。でも、物事の世界は、物自体も、使われていったときには変化していくでしょう。人間も変化していくでしょう。そういう中で物は捉えていかなければいけないと私自身は思いました。

### ●デザイン会議以降、新たな国際化に向けて

**青木** メタボリズムだよねというところはあるかもしれませんが。その後トヨタに戻られて、マネジメントもなさってという意味で、その後の変化みたいなものと、それから実行委員長をなさった経験で生かされたところがあればお聞かせ願えればと思います。

**諸星** トヨタの仕事でずっと定年までいた人間ですが、89年というのは、実行委員長として外部の仕事を一緒に経験させていただきました。前後で国際についての考え方は変わったかもしれませんが。

89年が過ぎたあと何をやってきたかという、結局、どんどんビジネスが国際化していくときに、デザインの国際的なやり方というのは、やはり現地現物でつくっていくべきだという方向づけがされるようになりました。デザインを、使っている人の場所で、現地の人と一緒にやるべきだ、と。そういう意識でトヨタでは、海外にデザイン活動の拠点をつくれというかたちになったのです。

その先頭を切っていたのが、89年のICSID名古屋会議をやるぞとって頑張っていた、私のボスの八重樫守さんでした。会社の方で現地で実際にデザインをやるという話になって、彼からも「おまえ、建物を建てに行け」と言われました。それで、「建物を建てればいいんですね」と言ったら、「建物だけではなくて、人もデザインしなければいけない。わかっただろう」と言われて、結局、マネジメントというようなかたちでデザインに携わることになりました。

89年の会議終了後は、90年に東京デザイン部長、国内拠点のデザインマネジメントの責任者（96年まで）、96年からは米国CALTYの副社長、海外拠点のデザインマネジメントの責任者を務めることとなり（2000年まで）、帰国後はデザインのグローバルな組織体制づくりがタスクです。デザインというのを国際

的にどういふふう活動していったらいいかというのが私の仕事になりました。

**青木** CALTY での活躍はかねてより聞いております。お話は尽きませんが、この辺りで一区切りとさせていただきます。どうもありがとうございました。

\*1:『口紅から機関車まで』レイモンド・ローウィ、藤山愛一郎訳、学風書房、1953年

\*2: Calty Design Research, Inc. は、1973年にトヨタ自動車が、米国のニーズや嗜好に応えるため、カリフォルニア州エルセグンドに設立したデザインスタジオ。1978年にニューポートビーチの新社屋に移転した。

### 3. ラウンド・テーブル「1989 名古屋デザイン会議への里程」

#### 3-3. 横割りのデザインと地域展開（山村真一）



山村真一:株式会社コボ 会長/元世界デザイン会議実行委員会プログラム委員)

##### ●三菱重工デザイン部の時代

青木 ラウンド・テーブル3人目のご登場です。山村真一さんを紹介いたします。山村さんは、ご自身のデザイン事務所、株式会社コボの会長をなさっていらっしゃいます。自社ビルのデザイン事務所というのは、私はコボしか知りません。50年にわたり非常に堅実な経営をお続けになって素晴らしいことだと本当に思います。

今日ご登場いただきましたのは、89年の段階で山村さんは名古屋地区、中部地区のある種のコーディネーター的な役割をなさっていたような気がいたしました。おそらくデザイン会議、デザイン博覧会にまつわる、山村さんしか知らない話が多々あるのではないかと思います。ぜひお話をいただければと思います。

先ほどちょっとお伺いしたら、1973年は山村さんが自分のデザイン事務所をつくられた年だそうです。ですから、73年あたりのデザインの状況、そうしたのも少しお聞きできるのではないかと思います。その辺りから少しお願いできればと思います。

山村 今日はたくさんご参加をいただきありがとうございます。私は60年代前半に三菱重工に入社しました。実は、50年代後半、高校生の頃ですが、三菱重工で飛行機の取扱説明書をつくるアルバイトをしました。

そのときに担当官としてついてくれたのが堀越二郎

さんという方で、零戦を設計した方ということで有名な方でした。スタジオジブリで宮崎駿さんが『風立ちぬ』という映画をつくられましたが、あの映画の主人公のモデルです。映画の中では本当に克明に当時の彼を表現されたのではないかと思います。すごく素敵な方で、つい取り込まれてしまう世界をお持ちでした。

もともと彼は飛行機屋さんだったのですが、当時の三菱重工は、戦車、電車、船、トラック、バス、スクーター、いろいろな製品を製造していました。私の仕事は航空機の取説です。日本画をやっていたので絵もわかるし、なんとか図面を見ながら組み立てていくこともできました。取扱説明書というのはとても面白くて、組み立てているあいだに、それを整備したり扱ったりする人の気持ちがどう変わっていくのかを想像して組み立てるという興味深い仕事でした。

その仕事の合間合間に堀越二郎さんは素敵な話をいつもしてくれて、暇があったらミスピントになった図面の古いA4用紙で紙飛行機を折って飛ばしっこをするわけです。到底彼にはかなわなくて、4倍も5倍もすごい速さで距離を飛んでいくという、航空機の設計をされる人はこういうこともできるんだと感動した覚えがあります。そういう流れもありまして、自然にだんだん引き込まれていって、とうとう「おまえ、うちの会社に来ないか」という話でスカウトされるかたちになりました。

そして、入って初めてやった仕事がMU-2という、初めて小型機で世界に躍り出るという構想を持った機種で、当時はできないことまでやらせていただいたというふうによく覚えています。当時、ホンダもやはり同じ構想を持たれていて、小型の民間航空機の会社をアメリカで立ち上げ、一気に工場まで建てました。それに対して三菱重工は頑固に、日本で作った飛行機をアメリカや世界で飛ばすという、一つの夢があったように思います。そんなことで、三菱に入って少し仕事をやっているあいだに、73年京都のデザイン会議が開かれることになりました。当時は三菱重工にもデザイン課がありました。

特に大きな全体の情勢としては、民間自動車を一家に1台というところを狙って、既にトヨタ、日産がものすごい勢いでスタートしていました。国民大衆車を

初めてつくるといふ、パブリカ、カローラというところですね。相当力が入っているのは見てわかりました。トヨタは八重樫さんとか、日産も自動車のエキスパートである佐野さんとか、素晴らしい人たちがリードされていました。マツダ、スバル、ホンダも、各社競ってやり始め、三菱も慌ててやらなければという話になりました。

当時、フォードとかGMの後席に座って、前席でハンドルなど持ったことがない人たちが社長、副社長で来られて、デザインを審査をされるということで、この状況をどう脱したらいいかというので非常に苦労しているときでもありました。

京都デザイン会議では、梅棹忠夫さんの「物に心」という話には私はずごく感動しました。当時、三菱には外国からたくさんエンジニアも来られていましたが、結婚式は神前で、パーティーは洋装で、催事はお寺を使うという日本のスタイルを、彼らはものすごく不思議がっていました。

こういうことを考えると、梅棹さんの言われた「物に心」というのは、宗教という問題ではなくて、ごく自然に生活の中にあることでした。物に心がある、机に物が当たったら、痛いでしょうと言って机の角をさす母親をよく覚えています。まさしく、物に心があるということは、私たちの周辺には多く存在したわけです。

大量生産の時代、そして情報化社会にどんどん入っていく状況の中で、多分梅棹さんは少しブレーキをかけるという意味でも、わざわざ「物に心」とか、クジラの話とか、とても面白くわかりやすく話されたのではないかと思います。その意味では、梅棹さんの基調講演には当時すごく好印象を持ちました。

### ●中部地区 JIDA とデザインの 80 年代

山村 さて、JIDA とかわり合いです、1980 年代前半だったと思いますが、当時から、デザインに関しては、縦割のデザイン界の中でとやかく言う話ではなくて、横断的に捉えられたもっと広義の意味でのデザインということに、これからのデザインは取り組まなければいけないのではないかという問題意識がありました。私が三菱重工を辞めた理由も、決して会社に不満があったわけではなく、この塀の中にこもった環境の中で仕事をしては駄目だ、市場の中でデザイナーは呼吸し生活をしながら社会に製品を送り出していくべきだろうと考え始めたからです。

当時、『塀の中の懲りない面々』という阿部議二の小説がけっこう話題になっていました。私たちはほかの部署に比べて、自在に外へ出たり、リサーチに出掛けたり、自分たちでテーマを見つけて調査したりするこ

とが、許されるポジションではあったわけです。やっぱり生活の場を変えないと駄目だと思いついたわけです。できれば三菱のデザインセンターなるものを、生産工場の中ではなくてマーケットの市場の中につくるべきではないかという話が進んでいたのですが、たまたま社長交代がありまして、そんな必要はない、従来どおりのままでいいというふうになったわけです。

当時三菱も、皆さんご存じのように、キリンビールとか、旭硝子とか、ニコンとか、東京海上とか、戦後の財閥解体の勢いのままで相当拡散してしまっていて、何かがあるとその方たちとの接点はあるわけですが、やはり仕事をもっと横断的に考えていくべきだろうということで、それなら飛び出て自分で事務所を開くことにしました。

ただし、あまり作家的な会社にはしたくないということで、会社の号も「デザイン」をつけなくて、株式会社コボという社名で定款を定めました。そうであっても「コボデザインさん」ということで、親しく皆さんに呼んでいただいて非常に感謝しております。

青木 名古屋のデザイン会議について少しお伺いしたいと思います。先ほども話題になりましたが、オリンピックが駄目になったからデザイン会議なんだというのは、一面正しいとは思いますが。

しかし、そういう単純な話ではなく、名古屋地区、中部地区のデザイナーが、横断的に集まった一つの運動体みたいなものが自然発生的にでき上がって、その辺りが一つの母体になって次の段階に広がっていくのでしょうか、多分それがあって、デザイン会議、デザイン博覧会が繋がったのだらうと思います。その辺りの事情はあまり外に出てない話かと思いますが、少しお話しただけです。

山村 先ほど皆さん方からご説明があったように、当時は市制百周年事業も日本中で盛り上がっていましたし、いろいろな状況がありました。

思い出してみると、1980 年直後ぐらいから、JIDA の活動としては、外に向かって広がっていくデザインのあり方ということで、愛知県立芸術大学の大讲堂や講義棟を使わせていただいて、デザインインターフェース、まさしくデザインの広がる世界ということテーマに、中部 JIDA の年次大会などを開いていました。このときも私はプログラム委員をしていました。

同じようなイベントがずっと続いていき、そしてデザイン会議の話が始まり、そのあとデザイン博覧会の構想が出てきます。このとき、中部地区の従来からあった中部のデザイン団体が横断的につながり一体となる中部デザイン団体協議会 (CCDO) が出来上がり、

会員数は最大時 5,000 名を超え、中部のデザイン行政や国際デザインセンターの設立、デザイン博の運営等の大きな力になりました\*1。

そして、デザイン博覧会は、デザイン界だけのものではなくて、大企業も、地域の工芸も、いろいろな企業や人たちがもっと参加するべきだろう。まずは中部圏の地域をどう巻き込んでいくかということで、INAX、今は LIXIL ですか、敷島パンとか、貝印の世界刃物デザインコンペとかがデザイン博覧会の中に流れ込んでいきました。INAX の協力で 150m の白鳥の床画をデザイン博覧会の白鳥会場の床に敷き詰めるイベントとか、いろいろなことを同時にやって、まさしく名古屋市と地域と、そして企業も横断的につながっていきました。これらも中部デザイン協会の仕事でした。

1989 年の名古屋での世界デザイン会議では、私も委員を務めました。ここにいらっしゃいます藤本さんはじめ、野口瑠璃さんとか、日本電装の山崎勝二さんとか、たくさんの方たちが会議運営に参加していただきました\*2。プログラムをできるだけ幅広く、外部との接点を取りながら、地域というものを発信していこうということで、7 つのプラネットをつくり、その中に 3 つずつ分科会をつくることで、30 近いプログラムが拡散されるかたちをつくりました。自由にこの中を行き来できるという非常に新しい取り組みをやりました。実際に参加された人は 4,000 人近くだったと聞いています。せっかく盛り上がった雰囲気をなんとか地域、行政、企業に広げていきたい、そんなふうに考えました。

もう一つ付け加えたいのは、本当にたくさんの方が来られますので、海外から来るデザイナーの民泊希望者にホームステイしてもらおうという掛け声を掛けました。これには中部 JIDA も CCDO も動きました。そして、百数十名の方にホームステイを喜んで受けていただきました。これが意外に新たな人間関係を生みました。全く言葉もできない方々も参加していただきましたが、海外のデザイナーと本当に親しく一夜を明かし、和気あいあいと次の日は一緒に会議に参加いただけるという、非常に不思議なプログラムでもあったかと思えます。

**青木** 簡単にまとめてしまうと、縦割りのデザインをまず横割りのにつないでというところから始まって、いわゆるデザインだけではなく、さまざまな領域、商工会議所であったり、学校でもあったりということになると思いますが、そういうところが参加するような場がある程度でき上がっていた。それでデザイン会議、デザイン博覧会が形成されていく。

もう一つ、その考え方はデザイン会議、デザイン博覧会の中でも生きていて、特に地域への広がりとか、国際的な交流とか、デザインとは直接関係ないけれども様々な場面をつくるとかという一つの展開をなさっていったのだと思います。

### ●中部圏の匠とデザイン会議

**青木** 最後にお伺いしておきたいのは、匠の話です。先ほどお伺いしたときに、有松絞りの話、それから中部地区ですと石川県が入りますので九谷焼とか、そういうところにも範囲を広げていくみたいなお話をされていましたが、そういうところはいかがでしょうか。

**山村** 先ほど言った一つのプラネットの中で中部圏の匠という部分がありました。ノリタケとか、ブラザーとか、多様な匠の世界の中に大企業もあるわけですが、もっと地域産業、地元でものづくりをしている匠も発信していこうということで、これは世界デザイン会議のプログラム以外で既に動き出していました。

中部圏の伝統産業として、名古屋市内の有松・鳴海絞り、瀬戸の焼き物、美濃の焼き物、関の刃物関係、一宮・岡崎の織物、いろいろな地域のものづくりがあります。私たちもデザインとして、地域をもっと世界に発信していくというところは徹底的にサポートしていくということでやってきました。有松に世界のデザイナーを集めてみようということで、有松絞国際会議を開催いたしました（1992 年）。

有松・鳴海は絞って型染めをするという特異な産地です。得意先は京都で、総絞りで高級な着物として販売すること以外にあまり販売チャンネルがなかったのです。こんな楽しいきれいなものはもっと発信できるのではないかということで、子どものファッションショー、絞りのベビーウエア、チャイルドウエアを発表するとかも致しました。国際絞りにあつた人には 3 千名もの人たちが有松地域に世界から押し寄せました。私もパネラーを務めました。

例えばインドの絞りの技術のあり方は今こうなんですよというのをワークショップで見せてくれるインドのテキスタイルデザイナー。あるいはインドネシアのバティックの織物など。本当に織物は世界に多様にあるということ眼前にして、有松の人たちも主催者でありながら大変に驚いていました。その時は、有松・鳴海地区は狭い地域なので、お寺、小学校、役所、あらゆるところを会場として使いました。また、有松でもぜひぶんとくさんホームステイを受け入れていただきました。

インダストリアルデザインが有松絞りとどうかかわり合いがあるのか考えていくと、かつては鍛(しころ)

を丸めてドボンと浸けていたのを、細かく糸で結びながら絞り、形状記憶をして、さらさらの立体的な涼しいウェアができるということがインダストリーかもしれない。そんなことから、まずはデザインを広げようということで、絞りデザインという言葉も本当に地域の中で使われるようになってきました。

そして、ほかでも、少し遠いところでは九谷焼がありますが、中部通産局管内の石川県はけっこう愛知県とも接近していて、いろいろな交流があるわけです。石川県としては九谷焼という焼き物を世界に発信していきたいということで、世界デザイン会議のワークショップに取り上げたらどうだろうという話を検討しました。石川県知事（中西陽一）にも応援していただいて、中心である九谷焼の産地の石川県立九谷焼研修所に名古屋から大型バスを仕立てて行きました。

これは実行委員長である諸星さんの「やってみたら」の一言で決まりました。最初は「えー、北陸までですか」と嫌な顔をされるかと思いつつ声を掛けたんですが、「いいよ」ということで実現でき、行ったらずいぶん喜ばれ、地域を巻き込んで、この時も全員が地域でホームステイという不思議なことが起こって、すごく楽しい一晩であったと思います。国内の作家も、鯉江良二さんや、千葉大学の先生だった杉田重雄さん、九谷のデザインに外部から力を入れている人たちも参加して、非常にいいイベントになったかと思えます。

そのほか、瀬戸とか、岐阜とか、あらゆるところで、まさしく地域の工芸と工業を世界に発信するということが、新しい風景として海外の方たちにも喜んでいただけたかなと思っています。1989年のデザイン会議において、地域を世界に発信するということが、目玉ではなかったかと思えます。

ノリタケの社長がセミナーの中で、1万年前のデザインということで焼き物のルーツを細かく説明されたり、白鳥の会場では関の日本刀の歴史のセミナーで磨き上げた新刀で試し切りをやりました。これについては、海外の方からの「それは武器ではないか」という質問に対して、「そうです、武器です。私たちは武器をつくっているんです」と答えられたのも、すごく日本的な答だったかと思えます。「ただし1年に2本しか許可をされないということを付け加えておきましょう」という刀鍛冶(刀匠)の素晴らしい回答もありました。

それから、新潟の花火のワークショップもやりました。「新潟の花火の尺玉を上げる、その心地はどうか」という質問に対して、「企業と民間の力を込めた一尺玉を空に仕掛けたときの気持ちは最高です」という、これも素晴らしい価値観の討議も印象に残ります。新潟から来ていただいた花火師の、匠の心とデザインという部分でもありました。

**青木** ご紹介いただいた部分は、いわゆるデザインのコングレンスとはかなり違う側面を入れ込んでいたという、89年の一つの大きな特徴ではないかというふうに思いました。またお聞きしていきたいと思います。ありがとうございました。

\*1: 中部デザイン団体協議会 (CCDO) は、中部地区デザイン 10 団体により、1998 年 7 月に結成された。10 団体は、中部クリエイターズクラブ、社団法人日本広告制作協会、中部デザイン協会、社団法人日本インダストリアルデザイナー協会、社団法人日本インテリアデザイナー協会、中部インテリアプランナー協会、社団法人日本商環境設計家協会、社団法人日本ディスプレイデザイン協会、社団法人日本グラフィックデザイナー協会・愛知、社団法人日本サインデザイン協会。

\*2: 世界デザイン会議実行委員会、野口瑠璃はアドバイザー、藤本清春は広報委員長、山村真一はプログラム委員、山崎勝二は分科会セッションディレクターを務めた。

### 3. ラウンド・テーブル「1989 名古屋デザイン会議への里程」

#### 3-4. 名古屋市のデザイン都市行政の展開（西野輝一）



西野輝一：株式会社国際デザインセンター 代表取締役社長／前名古屋市経済局長

**青木** 西野輝一さんをご紹介します。今は国際デザインセンターの社長をなさっています。前職は名古屋市経済局長で、デザインの所管のところでした。お聞きしましたら、若い頃に、デザイン博覧会の運営にかかわってらしたそうです。それから、歩みの中でご紹介いただけたと思いますが、名古屋市は 2008 年にユネスコのデザインシティに認定・登録されましたが、この事業にも携わってこられました。デザインとかかわりの深い方ということで、また国際デザインセンターの社長さんというところもありまして、本日は出席をお願いをいたしました次第です。

#### ●1989 年以前の名古屋とデザイン

**西野** ただいまご紹介いただきました、現在国際デザインセンターの社長をしております西野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、ご紹介いただいたとおり、名古屋市の職員になってすぐにデザイン博の仕事をして、この 3 月に名古屋市を退職したのですが、最後はデザインの担当局長ということもありまして、デザインに始まりデザインに終わる、いやまだまだデザインを続けなければいけないなど、そんなふうにいるところでございます。今日は、行政の立場で、そして私の感覚を含めて、1989 年の世界デザイン会議のところから現在までの名古屋市のデザイン都市行政の流れを、お話をしたいと思います。

先ほどから出ておりますデザイン会議の誘致につきましては、名古屋のオリンピック誘致の失敗がありま

した。1988 年は「幻の名古屋オリンピック」と言われておりました。東京でオリンピックをやる、大阪で万博をやる、次は名古屋が絶対に世界に大きく発信することをやらなければいけない、そういうふうなところがありましてオリンピックに賭けたわけでした。

当時の私の感覚でいくと、負けるわけではない、必ずオリンピックが名古屋でやられるんだと思っていたところが、ソウルに負けて名古屋では開催できないというふうになってしまいました。そのときの喪失感といいますか、名古屋市をはじめ、愛知県、経済界一体となって誘致をしておりましたから、そういった関係者の喪失感是非常に大きいものがありました。自信をなくして、これからどうしていくのだということになりました。

そういう中で、オリンピックに代わる世界的な、世界に発信できるような事業が必要だということが議論としてありました。一方で、1989 年は名古屋市制百周年ということで、その記念事業をやらう、博覧会的なものをやっつけよう、そういう検討も進んでいました。オリンピックの誘致ができなかった以後、そんな動きが重なっていきました。

そこに、先ほど来お話がありました、名古屋のデザインの関係者の方々のいろいろな動きがあった中で、ICSID 世界デザイン会議を誘致してはどうかという話が持ち上がりました。これは世界への発信とともに、ソフト的な事業ですから、名古屋はハードは強いがソフトは弱いという認識もあって、非常にマッチしているといえますか、ここで次の名古屋をつくるためには、デザインというキーワードは非常にいいのではないかと、そういうふうな話で誘致に舵を切りまして、誘致ができました。

さあデザイン会議だ、市制百周年記念事業は世界デザイン博覧会だというふうには、名古屋市政のテーマがどんどんデザインのほうにシフトしていったといえますか、どんどん結束してデザインの振興をやっつけようという流れがそこでできました。そして、各部門のデザイン団体が結集して中部デザイン団体協議会をつくりましたので、積極的にその動きをサポートしていきなりました。また、マスコミも中日新聞はじめ非常に積極的にサポートしていただきました。

そういうふうになって動き出したわけです。ただ、世界デザイン博覧会をやりますということを発表してから、市民の反応はなかなか厳しいものだったと記憶しています。要するに、「デザインの博覧会、何なんだそれは」、「何でそんなことをやるんだ」というような声が非常に多くありました。それから、東京の有識者からわれわれに寄せられたのは、「名古屋でデザイン博、すごいギャグだね」と言われました。名古屋はデザインセンスにあふれているとか、名古屋はカッコいい都市だというイメージはあまりありませんでしたから。

ただ実際には、名古屋はものづくりのメッカですから、日本で最初にインダストリアルデザインの団体ができたりして、デザインについては実は先駆的な動きをしていた地域であるわけです。しかしながら、市民の感情は冷めたところがあり、そういうところでなかなか盛り上がらないということがあったわけです。

当時の西尾武喜市長も一生懸命デザイン、デザインとアピールする中で、あるところでちょっと潮目が変わったなというのがありました。それは、まちがきれいになってきたことです。要は、デザインを進めていくのだという中で、ストリートファニチャー、まちのサインとか、駅舎、バス停のデザインに取り組んできました。高速道路の下にちょっとしゃれた公園をつくったりもしました。

そういう動きに合わせて百貨店も外壁をきれいに塗り直したり、化粧直しですね、そういうようなことがあって、デザインと言い出してからまちが気持ちよくなりきれいなようになってきたなみたいところが、だんだん市民にも受け入れられてきて、「なるほどデザインというのはこういうことをやっていくのか」みたいところで少しずつ浸透し出しました。そして 1989 年を迎える、そういう状況だったかなと思います。

### ●デザイン会議とデザイン博覧会の大成功

ここからはスライドも交えながら、お話を進めたいと思います。先ほども出しましたが、デザイン都市宣言が、1989 年 6 月の名古屋市議会で宣言されます(写真 3-1)。特に、「デザインを大切にす 世界に誇り得るまちづくりを進め」という部分で、とにかくデザインを大切にすまちづくりをやるということを、はっきりと宣言しています。しかも、これは市議会がしているということで、まさに行政、経済界、そして政治までもが一体となりデザインをやっていくのだということを、ここでははっきりさせたところがあります。

そして世界デザイン会議につきましては、関係者の方の努力によって、参加国 46 カ国、参加者数 3,764 人、成功裏に終わることができました(写真 3-2)。もう一つの世界デザイン博覧会は、実は大変苦戦をいた

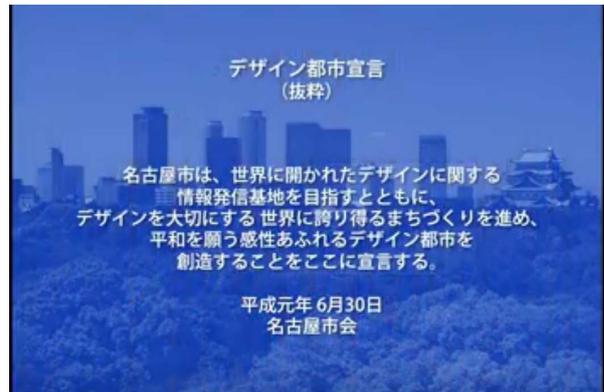


写真 3-1 ; デザイン都市宣言 (抜粋) 名古屋市会



写真 3-2 : 世界デザイン会議

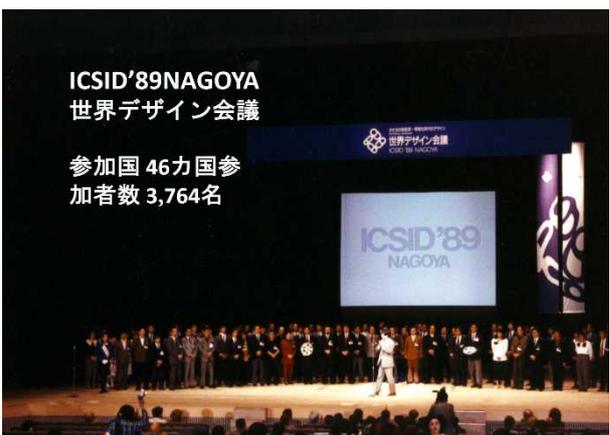


写真 3-3 : 世界デザイン博覧会

しました。入場者数 1,518 万人、これは結果ですが、本当にお客さんが来てくれるのだろうかということで大変苦慮をしたというのが、私は実際にやっていたので、実感でございました(写真 3-3)。

まず市制百周年の都市というのは日本にいっぱいあって、どこも記念事業をやっています。その多くが博覧会をやっているのです。ただでさえ観光都市というところでは強みのない名古屋でもありましたから、そういう状況で本当に全国から入場者を呼べるか。博覧会の成功、失敗というのは、入場者が目標人数に達したか達しないかで大体評価されます。デザイン博は 3 会場が設けられ、3 会場合わせて 1,400 万人というのが目標人数でしたので、それは絶対にクリアしなけれ

ばいけないと、関係のわれわれは必死になっていました

一つのエピソードがございます。ある名古屋市の産業医の方が言っていました、デザイン博の仕事とは全く関係ない職員が、デザイン博が始まったら急にメンタルが悪くなり、大変調子が悪いと受診に来たそうです。しばらく経って会期中盤以降になりますと入場者数がどんどんどんどん増えてきました。そうするとその方は一遍に元気になったそうです。

要は、最初に入場者が少なかったですから、それが苦になって精神的につらかったのが、入場者が増えてくると一遍に元気になった。直接かかわっていない職員でも、それくらい入場者数が気になっていたというのがそのときの実態です。名古屋がオリンピック誘致に失敗した、だからデザイン博は絶対に失敗できない、1,400万人は絶対入れなければいけない、そういうプレッシャーといいますか、危機感がものすごく強かった、そういう状況でした。

しかし、途中からどんどん入場者が増えました。その一つの要因としては、これがデザイン博だったからだとは私は思っています。パビリオンもアトラクションもそうですが、一つひとつがデザインマインドをもって、デザイン博に相応しいことをやらなければいけないという思いが強くなったと思います。先ほどから紹介されていますが、市民参加でデザインに関連したさまざまな催しもされました。

一つ印象に残っているのは、会場内の清掃員です。要はごみを集めて運んだりする人ですが、デザイン博の中ではクリーンスタッフという呼び方をして、白と明るい青の2色のユニフォームにしました。これは非常に格好がよくて、その格好のいいユニフォームを着た清掃員の若いお兄さんお姉さんがはつらつと動き回っている、会場のイメージが非常にいいといいますか、そんなこともありました。そういうことで、最終的に「入場者数 1,518 万人でデザイン博は大成功を収めました」と言うことができました。

### ●ポスト・デザイン博のデザイン振興の流れ

この「大成功を収めました」ということが非常に大事で、これが成功したのだから、デザインの取り組みはこれからどんどんやっていかなければいけないという思いは一層強くなりました。これが失敗だとまたシミュンとしたかもしれませんが、成功したことで勢いに乗った、そういうところがあります。そして、先ほどご紹介しました中部デザイン団体協議会には、さまざまな分野のデザインの団体が加盟して(写真3-4)、一つの集合体というかたちで、行政と協力し合って、その後のデザイン振興に非常に貢献いただいています。



中部デザイン団体協議会  
Council of Chubu Design Organizations

CCC	中部クリエイターズクラブ
CAC	一般社団法人 中部広告制作協会
CDA	中部デザイン協会
JIDA	公団社団法人 日本インダストリアルデザイン協会
JID	公団社団法人 日本インテリアデザイナー協会
CIP	日本インテリアプランナー協会 中部
DSA	一般社団法人 日本空間デザイン協会
JAGDA	公団社団法人 日本グラフィックデザイン協会・愛知
SDA	公団社団法人 日本サインデザイン協会
JCD	一般社団法人 日本環境デザイン協会

写真 3-4：中部デザイン団体協議会の構成



写真 3-5:国際デザインセンターがあるナディアパーク

私の今おります国際デザインセンターですが、その後デザインを振興していく拠点が必要だということで、新たなビル、ビル全体はナディアパークといいます、画面(写真3-5)の左側の低いほうのビルに私も入って入って、高いほうは一般の企業等が入っています。非常に目立つビルで大変注目されることとなりました。名古屋の中心の栄の南西のほうにあります。その辺はこれができるまでは人通りがほとんどなかったのですが、これできて一遍に人通りが多くなって、栄の南の街区が非常に活性化しました。

それから、デザインを推進する上では大学の取り組みも必要だろうということで、名古屋市立大学に芸術工学部を設けまして、新しいクリエイターを排出しています。デザイン博以降、世界三大デザイン会議も開催いたしました。世界デザイン会議、世界インテリアデザイン会議、世界グラフィックデザイン会議の三つですが、名古屋では残りの二つの世界会議もやったわけです(写真3-6)。これによって、分野を幅広くデザインを振興していくという姿勢を明確にしているところがあります。

それ以外にも、デザインに関する事業はさまざまやってきておりますが、ARTEC という事業はデザイン博の年から7、8年やりました(写真3-7)。いわゆる

メディアアートとデザインの展覧会といいますか、そういったデザインの境界領域を広げるような取り組みも行ってきて、その後の関係の国際会議の誘致にもつながっていったという経緯もございます。

一番新しい事業が「ストリーミング・ヘリテージ | 大地と海のあいだ」になります。画面(写真3-8)の写真は堀川という、江戸時代に名古屋城に物資を運ぶためにつくった運河がルーツですが、こういった歴史的な文化遺産と現代アートを組み合わせて新しい表現をするわけですが、そのような事業も行っていきます。

それから、先ほどちょっとご紹介いただきましたユネスコの創造都市ネットワーク事業がございます。世界三大デザイン会議などの実績をもとに、2008年に日

本で初めて、神戸市と一緒に、ユネスコの創造都市ネットワークに、いくつか分野はありますがデザイン分野で加盟いたしました。ほかのデザイン分野の海外の都市とのネットワークを生かしながらデザインの振興事業を展開しています。

### ●デザイン都市行政持続への課題

そういったことで、デザイン都市行政をずっと進めてきておりますが、今申し上げたことだけ聞いていただくと、名古屋市は一生懸命よくやっていると思われるかもしれませんが、課題はやはり非常にたくさんございます。その中の一つに、熱かった世界デザイン会議、デザイン博のあの1989年から30数年が経ちますと行政の意識も変わってきているということがございます。

実は、10年ほど前に国のほうで事業仕分けというのが流行っていたと思いますが、名古屋市もそれと似たような事業仕分けをやりました。いくつか候補になる事業をピックアップして、それを事業仕分けにかけるわけです。市民から評価員を選び、その評価員がこの事業は中止してくださいといったらやめる、続けていいですといったら続けられるという、そういうふうなことをやりました。その事業仕分けの対象に、このユネスコの創造都市ネットワーク事業が選ばれてしまったのです。

今申し上げた流れでいくと、なぜこの事業がそんなものにも選ばれるのか私としては非常に不思議で仕方がないのですが、選ばれたのです。選ばれたのですが、行政よりも市民のほうがよく知っていたといいますか、実は私はそのときの担当課長で、この事業の意義とか活動内容を説明したところ、市民評価員の方の圧倒的多数で、この事業は続けてくださいと言ってくれました。そういうこともありますので、時間の経過の中で意識の薄れみたいなところをどうしていくのかというのは非常に大きな課題です。

それから、デザインというのは非常に分野が広く、デザイン都市のコンセプトがなかなか市民に伝わりにくいところがあったと思います。行政は基本的に縦割りですので、文化、産業、まちづくりは、みんな違うセクションがやっていますから、そういう意味では一体としてデザインをとというのはなかなかやりにくくなっているという状況もあると感じています。

そういう中ではありますが、熱かった1989年があったからこそ、今までずっと国際デザインセンターも存在をして、そして総合的なデザイン振興を名古屋市としてやってこられました。今後三大デザイン会議のような大きなことはやれないかもしれませんが、時代に合ったかたちで、デザインの取り組みをしていけた



写真 3-6 : IFI'95 会議と IcoGrada2003 会議



写真 3-7 ; ARTEC'89



写真 3-8 : ストリーミング・ヘリテージ

らと考えます。特に現在は、大きなテーマとしてイノベーションとか、インバウンドとかありますから、今必要な施策テーマに絡めながらデザインの事業の展開を考えていきたいなと思っております。

特に現在は、新しい価値をつくるのが大事だと、一般に言われるようになってきています。まさにデザインの力というのが、さらに必要性が高まっていると思っています。私としては、そういうタイミングを捉えて、これからさらにデザインの振興に力を入れていきたいと考えております。どうぞ皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。ご清聴いただきありがとうございました。

**青木** 二つぐらいが強く印象に残りました。白鳥地区の再開発、それから栄の再開発のように都市政策とうまく絡めている辺りは、なかなかうまいなと思いました。

オリンピック誘致の失敗がトラウマ的になって、それをリカバーするという話かもしれませんが、デザイン会議からデザイン博、デザインセンターにつなげて、それから人材育成で名古屋市立大学に芸術工学部を設け、前後して IFI、それから Icograda の世界会議を誘致して盛り上げていくという継続性というのは、私はかなり熟達した人の設計だなと思いました。それがまず一つです。もう一つは、ユネスコのデザインシティで、最初に根っこにあったシビックプライドみたいな問題が、初めてそこで射程に入ったのではないかという感じは受けておりました。

そういう一つの大きな流れを俯瞰するところから言うと、非常に重要な問題は、最初の段階は中心が総務局ではないかと思いますが、そういうところに始まり、それが経済局はじめいろいろな部局の事業に広がって、そうなる行政の中で難しさみたいな問題がだいぶおありになったのではないのでしょうか。

**西野** 大きいのは、トップといいますか、市長がどういう政策を掲げて当選して、どうやっていくかにかかっています。89年当時は西尾武善市長のトップ政策になっていて、今申し上げた大きな盛り上がりの中で、その政策の継続性みたいなところで、三大デザイン会議あたりまでは引っ張っていったのかなという感じがします。

ただ、時代も変わり人も代わると政策テーマが変わってきて、次の市長になると中心になるのは環境みたいな話になってくる。そうすると、縦割り行政の中で、環境という観点から、当然デザインもかかわってはきますが、デザインの中でどうかというのではなくて、環境の中でどうかみたいなことが強くなってきます。

そういう点で継続性の難しさというのは実質的にあると思っています。

**青木** だんだんとコモディティ化してくる部分と、それから行政の中で縦割り化してくる、これはいつもすごい闘いだと思います。最後にお尋ねしたいのは、名古屋市にとってデザインというのは何だったのでしょうかということです。代案として出てきたというのはすごくわかりますが、これでいこうみたいな問題意識というのものも、何かあったのだらうと思うのです。最後におっしゃっていた継承の難しさみたいな話の底流ですよ。この点について少しお願いできればと思います。

**西野** 名古屋市の職員、それとマスコミとか全部含めて関係の皆さんは、89年のデザインの動きがあるまでは、デザインというものをしっかり捉えてなかったと思います。これをやることによって、デザインというのは「夢をかたちに」といいますか、要するに目的に向かってかたちづくっていく、そういう取り組みなので、そういう考え方を持って臨むことが大事だということを、当時の職員も理解をし出したというところがあります。

まちづくりについても、そういう流れの中で名古屋都市センターがつくられて、デザインと絡めてまちづくりをしていこうという動きになりました。名古屋市に与えた影響というのはそういうふうなところがあるかなと思います。熱い時代を知っている人間としては、今の若い人たちにもそういうのをなんとか伝えたいと思っているわけです。

**青木** ありがとうございます。この会議自体もそういう思いでつくらせていただきました。以上でラウンド・テーブルの部分を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

## 4. 対談「国際化を希求した時代とデザイン」（宮崎修二・青木史郎）



宮崎修二さんをご紹介します。宮崎さんは、通商産業省でデザイン行政に携われ、1993年輸出検査及びデザイン奨励審議会の答申（中間答申）、「時代の変化に対応した新しいデザイン政策のあり方」をまとめられました\*1。「新しいデザイン政策」は、ポスト産業社会に向けたデザイン政策を語った答申と思います。

その後、デザイン行政が貿易局から産業政策局に移管されますが、そのときサービス産業課長として、再度デザイン行政を統括する役を担われました。デザイン行政を2回にわたりみていただいたわけです。デザインの創作についても深い造詣をお持ちです。



**宮崎** 宮崎でございます。造詣が深いと言われると非常に忸怩たるものがございます。ただ今ご紹介いただきましたように、私は通産省でデザイン行政を担当した経験がございます。それから、日本デザイン振興会にもいろいろなかたちで関わらせていただきました。微力ではございますが、デザイン行政、デザイン振興活動にいろいろ携わってきました。

今ご紹介がありました答申に関してですが、役所で出した審議会の答申でありますので、しきたりとして誰が書いたかは言わないことになっております。93年のことです。もうそのところはパブリックドメインでいいと思います。確かに作業的にまとめたのは私どもですが、これを誰の名前で出したかという、当時のトヨタ自動車会長の豊田章一郎さんになります。デザイン奨励審議会の会長をされていて、1993年6月に豊田章一郎さんが答申を出されたということで、当時わりと注目を集めました。

先ほど来、名古屋市のデザイン行政の話が出ておりますが、実は私は名古屋で10年ほど勤務しておりました。そのときに、国際デザインセンターもそうですが、愛知県や名古屋市、名古屋商工会議所とも、デザインも含めて地域振興の話もいろいろさせていただきました。なので大変に懐かしいのと同時に、感慨深いものがございました。

1989年のデザインイヤーの年は、私は石川県に商工課長として出向していて、中西元男さん、川崎和男さん、コシノヒロコさんとかをお呼びしてシンポジウムをやった経験があります。石川県にいた2年間は、先ほど九谷焼の話がございましたが、それとともにデザ

宮崎修二：元 通商産業省 検査デザイン行政室長／一般社団法人高度技術社会推進機構（TEPIA）顧問（写真上）

青木史郎：元 公益財団法人日本デザイン振興会 常務理事／一般社団法人国際デザイン研究フォーラム代表理事（写真下）

**青木** ラウンド・テーブルにご登壇いただきました4名の方々からは、感動的なお話をいただきました。デザインへの思い、それから熱気が、参加者の皆さまにも伝わったと思います。この対談では、少し視点を変えて、デザインの行政・振興というスタンスから、デザイン会議とデザインイヤーについて少し客観的に考えていきたいと思っています。

インについてもいろいろ先進的な取り組みをいたしました。その時、榮久庵先生にはずっとご指導いただいていたものですから、デザインについて非常に勉強になったと思っております。デザインの作法といいますか、基本的なところは石川県で習い、そのあと通産省に戻り検査デザイン行政室長をいたすこととなったというわけです。

先ほど西野さんからお話がありましたように、名古屋の皆さんが国際デザインセンターをつくられたときに、県や市や商工会議所のほうでお金を集められました。それに対して国の方では、当時 NTT の無利子融資という、今から言うとうすごいオールドファッションドな政策ツールがございまして、これで支援することとなり、私は担当室長として名古屋に随分行き来していたことを思い出しました。そういう意味でも大変感慨深く、こういう場に呼んでいただいてありがたく思っております。

### ●デザイン行政の特殊性

青木 さて、ここでの論点は3つあります。まず、デザイン行政はかなり特殊ではないかということが1つ目です。2つ目は、通産省は1973年のデザインイヤーを提唱するにあたり、榮久庵さんたちのデザイン論を、いわば丸飲みするようなかたちで答申を書かれているような気がします。これはありですかという質問です。3つ目は、1993年に答申をお書きになった時のことですが、どのようなスタンスで次の時代へのシナリオを考えられたかということです。

デザイン行政とかデザイン振興というのはちょっとわかりづらいので、ごく簡単に自分の例ということでお話をしておきたいと思えます。私はデザイン振興を職業にしてきました。この仕事のとても重要なところは、人に向かって「デザインは大切だ」と声高に言うことではないということです。

「デザインは大切だ」と一生懸命に言っても、相手は「誰だって自分のやっている仕事は大切だと言うに決まっている」、こうなります。そうなりますから、相手の立場に立って、例えば経営者の方であれば、簡単に言えば、デザインを導入すれば金になるとか、あなたの名誉は高まりますとか、そういう卑俗なところも含めて説明しなければ納得してもらえないという話になります。そのような経験から推し量ると、デザイン行政はえらく大変な仕事ではないかと思ったのです。

今私が言ったようなことは多分行政でも同じで、「デザインは大切ですから」と言っても、通産省内を話がすんわり通るわけない、予算が通るわけない、そういう話だと思います。そうしますと、それを行政として推進するためには、デザインでもってわが国産業の質

的向上を図るとか、国際化を推進するとか、そういう文脈をきちっとしなければ、それは誰も聞いてくれないだろう。それで、デザインを政策論として語るのは、とても難しいと思ったのです。

しかも通産省の行政は基本的には業振興ですよ。例えば自動車、繊維、石油とあって、これは大体見えるものであり、業界がしっかりしている分野です。それからもう一つ、必要不可欠だと誰も理解しているというのが、まず原則だと思います。ところが、デザインは必要不可欠かという、「え？」という話ですし、見ようとしても見られるものでもありません。しっかりした業界も無いわけです。

宮崎 国の役所が何をやっているかというのは、皆さんご存じのようでいて、多分あまりご存じないのかなという気はします。通産省は何をやってきたかという、例えば1960年の世界デザイン会議の話が出ていましたが、あの頃の日本は基本的には戦後復興から高度経済成長させるという時代でした。そのときに、何でご飯を食べるかということ、製品をつくって輸出をどんどんして外貨を稼いでいくみたいなどころがあったわけです。

いろいろなモノをつくって売るわけですから、海外から模倣ではないかと言われることもありました。それに対して、「それが何か？」と言って居直るのではなく、「模倣してはいけません。独自のものをつくっていくんだ」と。もともと日本にはそういう独自の産業の素地もあったので、模倣はなくそうということで、デザインを振興しようという話になったと思うんです。

別の視点で言うと、先ほど「業」振興の話がありました。これは実は縦割りの行政の話でありまして、通産省には、今の経産省もそうですが、一方で横割りと言いますか、各産業分野に共通した政策もあるわけです。今言ったデザインで模倣対策をしよう、そのためにグッドなデザインを奨励しようというのは、横割りの行政なわけです。縦・横の行政をやっているという観点で言うと、われわれ自身はそんなに違和感はないというのが一つあります。

それからもう一つ、ちょっと抽象的な話になるかもしれませんが、「ハレとケ」と言い方がありますよね。ハレというのはフェスティビティ [festivity] みたいな話で、ケというのはオーディナリー [ordinary] という意味だと思いますが、毎日毎日産業界が一生懸命仕事をして、それが国富を高めていくという部分がケに相当します。産業界で働いている人々、つまり一般の生活をしている人たちはたくさんいますし、地域で働いている人たちも多勢います。

そういう人たちに対して、例えば模倣してはいけな

いよ、いいデザインを、いいモノをつくろうではないかという話すことは、ある意味では教義みたいになるわけです。教義というと宗教的に聞こえてしまうかもしれませんが、哲学というか、そういうハレの側面があります。デザインはハレの部分も大きいわけです。通産省の仕事の中では、そういう「ハレとケ」を両立させることが昔からあったと思うので、私としてはそれほどおかしいということではないですね。

重要なのは、デザインというのは先ほどハレとは言いましたが、日々のいろいろな活動、仕事の中でうまくそれを適用していくというのが重要になります。「食べられるデザイン」といいますか、単に絵として飾っておくものではなくて、実際に手に取って使う、使い込む、そしてそれが生活を豊かにする、こういうことがやはりデザインの本質だと思うので、通産省はそういう発想で仕事をしてきたのだと思っています。

**青木** モアベターを発信していく。ビジョン提示をしていく部分というふうに位置付けられればよいですか。

**宮崎** ハレという部分はそういうことです。つまり、こんなふうになりますよ、こんなことをしたほうがいいですよ、世界はこうなっていますよ、みたいな話です。じゃあこうしましょうというビジョンを出すというのが、まさにハレの部分で、それに向かって各産業界とかが、いろいろな日々の仕事をしながら、こういうことをしよう、こういう分野に出よう、そういうことを考えるという、その両輪ということだと思います。

**青木** 1958年に通産省にデザイン課ができて、デザイン行政が大きく進んでいくわけですが、多分その時代のデザインというものが持っている光り輝き度というのでしょうか、それはかなりのものがあったのではないかと想像します。これは日本だけではなくて、イタリアでも、ドイツでも、イギリスでも同じという話になります。今日言うところのメソッド的なデザインとはちょっと違って、それ自体が輝いていたところがあるのではと思うのですが。

**宮崎** 行政の部署や仕事というと普通は漢字で書く言葉が多いですが、「デザイン」は日本語にならないので片仮名でそのまま使ったみたいです。

今は違いますが、昔は霞が関の各省庁の仕事の内容が、国家行政組織法とか、施行令とか、省令とかに出てきます。その中に、「デザインに関すること」と書いたのは通産省だけだったので、景観デザインみたいなことを始める役所が出てきたときに、「デザインというのは何ですか。あなたのところに権限があるんですか」

みたいなことを言われたこともありました。「デザイン」という言葉自体が、ある意味では力を持っている言葉だった、そういうことだったのだと思います。

### ●72年答申にみる通産的プロセス

**青木** 次の質問です。1973年の世界インダストリアルデザイン会議、これについての企画書\*2を皆さまにお配りしました。榮久庵さんが直接書かれているかどうかはわかりませんが、私から見れば榮久庵節ですね。一読して、悪くはないなという感じです。

簡単に言えば、「物に心を、だからデザイン」という話です。「デザインの究極の目標は生活文化の構築である」など、現在ではある意味当たり前の話となったデザイン論が展開されています。デザインサイドとしては、それは十分に飲める話です。少しはかっこいいことを言わなければいけませんので。

一方、デザインイヤー開催を決めていく答申「70年代のデザイン振興政策のあり方」\*3が1972年に出てきます。実は、そこには榮久庵さんのビジョンが、そのまま反映されているように見えて、「なぜ？」という感じがいたしました。

この答申の最初の部分を少しだけ読みます。デザインのさまざまな活動は「いずれも人間と「もの」との多様ななかかわり合いの中で、人間が「より人間らしく」生活をしていく視座を確保する意図に基づくものであり、このことこそまさに「デザイン振興政策」が人間性に立脚した1970年代の産業経済政策の重要な課題として位置付けられるゆえんである」。これはちょっと盛り過ぎだろうという感じもします。

**宮崎** 私はこれはいかにも役人が書いた文章だなと思うと同時に、特にこういうことをしたい、例えばデザインをもっと振興したいというときには、目的的にもごとを考えて、「よし、これはいい考えではないか。よし、それに乗った」というのが、大体通産省的な仕事のやり方でありまして、新しいもの好きというのがあります。

それから、さっきの「ハレとケ」で言えば、ハレの部分はどんどんケに、わかりやすくと言いますか、キャッチーなものにしようという、そういうことをやる役所でもあったので、そういう意味ではあまり違和感なく聞くことができました。

というか、基本的には、1973年のICSID会議もそうですし、1989年の世界デザイン会議もそうですが、デザインを振興しようという文脈の中では、何をやったら一番いいのかということ、「それはデザインを一生懸命やっている人たちの考えていることだよ」というのがまずあるので、それに対して四の五の言うことは

ないということです。だから、尊重するというか、うまく乗っていったということではないかと、私は思います。

**青木** ここまで惚れ込んでいただくと、デザインサイドとしては嬉しいのですが、それで施策ができるのかという感じがいたします。私は、通産省の方々から何度も「デザインは政策にならない」と言い続けられましたので。

**宮崎** 少し補足しますと、いわゆる一番上位の政策の考え方は、例えばデザインに携わっている方々、フリーランスの方でも企業内の方でもそうですが、デザインでご飯を食べている人たちが何をどうしようと思っているかという部分が重要なので、先ほど「ハレとケ」と言いましたが、ハレの部分がまずは重要になります。これを否定する気はありませんし、それはもっと進めていかなければいけません。

それを具体的な施策に移すときには、例えば人材育成をしましょうとか、あるいは地域振興をしましょうとか、そういう話になっていくわけです。これが審議会の答申のある意味ミソですが、非常に大きなビッグピクチャーがあって、各論になっていくと具体的にこういうふうになりますよと、あまりおかしくならない範囲で流れをつくるという、そういうテクニックは実務担当にはあると思います。もちろん各論レベルで、ここは違うのではないかという議論が審議会であれば、それはそれで対処すると思います。

### ●93年審議会答申の生活者視点

**青木** 89年、90年のデザインイヤーが終わって3年目に答申をお書きになって、そのときにはイヤーとか会議の広がり方といったものを、どのように受け止められたのでしょうか。

**宮崎** 1989年、先ほど私は石川県にいたという話をしました。その年のごろに東京に帰ってきたのですが、その2年後ぐらいに検査デザイン行政室長になりました。これはある意味では、宴のあとというか、遅れてきた青年、そういう感じでした。別に私が個人的に遅れてきたというわけではなくて、デザインイヤーの89年と私が検査デザイン行政室長を務めた90年代のはじめには大きな違いがあったからです。それはバブル崩壊があったということです。

90年代のはじめぐらいには、ものはつくっても売れない時代になっていて、ニーズが満たされているので買ったものはないと言う人もいました。一方で、ものを買うだけでなく、生活を楽しまたい、まさに「生

活者」としての生きがいを見つけていたり、あるいは自己実現をしたりする、そういう意味での生活者のなものの考え方が重要ではないかということは大体みんなわかってきてはいました。それとデザインはどういう関係にあるのかという部分に関して、もう一段書き込みをしなければいけなかったことは確かです。

いずれにしても、そういう状況変化の中で答申を書くときに、それは議論があるかもしれませんが、「生活者」という言葉をここに入れ込むことにしたということです。73年のICSID会議の趣意書の中に「生活者」という言葉が入っていて、73年から93年の答申まで20年かかりましたが、政府の答申の中に「生活者」という言葉をちゃんと入れられるようになったというのは、ある意味では進歩かもしれないし、遅れてきた何かかかもしれません。

あるいは、73年のICSID会議の趣意書が少し進み過ぎていたのかもしれませんが。それが年数を経るなかで現実とのギャップが次第に減ってきて、そういうことを政府の答申で書けるような状況になってきた、ということもあるのかなという気はします。

**青木** 73年世界デザイン会議に向けて榮久庵さんのまとめられた内容は、発祥の地であるアメリカのインダストリアルデザインから見れば、「えっ？」という内容だったと思います。そういう意味では、ヨーロッパの感化を受けた人たちが、モダンデザインの流れを汲み取り描いていった言説を下敷きにしていると思います。

ただし、ヨーロッパの方々には、「人の心と物」を関連づけてとらえようとする思考は、全くといってよいほどないと思います。そういう趣旨の言説を、イデオロギー的に榮久庵さんが非常にうまくつくられたのではないかと、勝手に想像するのです。それゆえに、そこで語られた「生活者と生活者をつなぐ」という理念には、私はあまりリアリティーがなかったような気がします。

ただ、そのリアリティーがなかったはずの語りや、80年代を過ぎて90年代になった途端に、リアリティーを持ち始めるという動きは一つあったんだと思います。ただ概念だけだったものが具体的な実体として見えていく。そこから産業社会型のサプライサイドのデザインはもう無理だということが見えてきたときに、「生活者」という概念が非常にクローズアップされてきたのではないかと、そんなふうに答申を読みました。

**宮崎** 内輪の話をするすると、この答申を書くまでの半年ぐらい大変な猛チャージがありました。「猛チャージ」というのは、私と青木さんとで、週3日ぐらいデザイン振興会の会議室でブレインストーミングをがんがん

やっていました。

これは実は黒歴史のようなところがあるのですが、「デザイン振興政策アーカイブ」の中に記録が入っていて、言ったことが全部出ていて、このあいだ見て驚きました\*4。かなり猛チャージをして、とにかく自分たちの頭の中で、細かいパーツも含めて、全体のビッグピクチャーをつくり上げなければいけないと、やった記憶があります。

その中でだんだんわかってきたことは、ただ単にきれいなものをつくったり——きれいなものだけでなく、機能がコンセプトを通してデザインになっていくということだと思いますが——、そういうことも重要だけれども、やはりデザインを使って新しい生活様式とか、ニーズをつくり上げていくことが重要ではないかということです。

さらに、それを地域の振興に役立てるとか、もっと言えばアイデンティティを明らかにするとか、あるいは国際的な協力をするとか、中小企業がこれを使ってどんどん新しいマーケットや顧客を広げていくためには、やはりデザインというのは非常によいメディアではないかということが言いたかったのです。そのことは、申し上げておきたいと思います。

**青木** 答申の中で、「生活価値の創造」「社会価値の実現」「アイデンティティの形成」という3つの論法でデザインのあり方を提示されます。アイデンティティというのは、個人のアイデンティティ、社会のアイデンティティ、コミュニティのアイデンティティ、企業のアイデンティティ、当然いろいろ変化をしていくわけですが、そうしたものを形成していくツール、あるいはメディアとして、デザインを位置付けようとしていたのではないかと思います。

この答申の中で語られているのは、時代の変化をどういうふうに捉えるのかです。デマンドサイドについても、デマンドサイドからデザインすべしとする理念は昔からありました。しかし、インターネットが普及して初めて現実味を帯びてきようところがございます。そういう意味でこの答申は、予兆的に新しい時代を一生懸命描こうとしたものではないかと思います。

仮にこの答申が2000年ぐらいに出ていたとすれば、当時と違って非常に面白い影響力を発揮できたのではないかと思います。ちょっと早かったのかなという気もしないではありません。榮久庵さんも早かったみたいなことを言っていたと聞いたことがあります。デザインには常に早過ぎるところがあるのだと思います。

**宮崎** ありがとうございます。先ほど「遅れてきた青年」と言いましたが、そういう意味ではちょっと速く

走り過ぎてしまったかもしれないところがあります。

いずれにせよ、こういう答申を書くことによって、逆に社会や産業界や国民やいろいろなところに、ある意味ではインパクトを与える、それによっていろいろなことを考えていただく、そういう役割が政府の答申にはあるのではないかと思います。

現在は、「答申」という、こういう性格の提言書はなくなりました。ビジョンを示す、あるいは問い掛ける、これ自体がまさに私はデザインの作法ではないかと思うので、是非こういうことをこれからもやっていただければと思う次第です。

**青木** ありがとうございます。

**質問者（諸星和夫）** とても面白いお話でした。私の印象では、私はものづくりの出身なので、いつもサブライ側の頭で考えてしまうんです。例えば1973年の世界インダストリアルデザイン会議京都の前の年でしたか、ローマクラブが『成長の限界』というレポートを出したでしょう\*5。そういう流れは把握されて、その当時の答申には出ていますか。

**宮崎** 『成長の限界』というのは確か72年ですよ。ちょうどその頃は、例えば石炭は150年で無くなりますよ、石油は20年で無くなりますよ、みたいなことが書いてあって、みんなで大変だと言った覚えがあります。

ただ、その年数がどんどんどんどん延びていきました。なぜ延びていったかという、石油ショックとかでどんどん石油価格が上がっていくと、採掘のためのコストが賄えるので、そうすると埋蔵量が増えていくことになるわけです。もちろん、ローマクラブの指摘のようなそういう問題もあるので、環境問題は大きな政策課題になってきました。

70年代のはじめのことを思い出しますが、「モーレツからビューティフルへ」というCMがありました。また当時は「くたばれGNP」みたいな議論があったりもしました。90年代は逆に景気が悪くなって、ものが売れなくなっている時代だったので、「成長の限界」みたいな部分は、後方に下がっていたということはあると思います。

**諸星** 1989年に中国で民主化を求めた天安門事件、1990年に東西ドイツの統一という、とてつもない意識の転換が動いたときでもあり、そのあと途端に景気がどーんとなりましたでしょう。そういうときに、どうということをお考えになっていたのかなと思っています。

**宮崎** 2点あります。一つは、皆さん方はデザインに造詣が深い方々なので、釈迦に説法ですが、デザインは昔からよく言われている色形ではないんですね。例えば素材とか、あるいは93年の答申にも書きましたが、リサイクルあるいはリユースする、そういうことも含めて素材に対する知識をもっていること。それから機能、どんな機能が必要なかの洞察は重要で、どういう素材を使っていけば環境にもよく、しかも求められる機能を達成できるのか。そういう考え方をデザインプロセスの中で、最後のコスメティックスみたいなどころではなくて、最初から入れていくのが重要だという意識は、もうその頃にはあったと思います。

もう1点は、おっしゃるように89年はすごい転換点で、私はAPECに出向でシンガポールに行かされたのですが、そのときアジア太平洋地域は冷戦が終わって経済の時代になっていました。だから、そこらじゅうで経済活動が活発になってきて、ローマクラブの『成長の限界』はある意味で70年代の趨勢だったのですが、90年代には突然ガーンとGDPも上がってくるわけです。そういう時代状況にあって、サプライサイドを見ると、日本の産業界はちゃんとデマンドに対応できているのかということと、もう一つはアジア諸国でコンペティターがどんどん出てくるわけで、それに対してどうするのか、どういう違いを出せるのかというのが、より重要になったことは感じていました。その中では、やはりデザインは重要なのだと思っていました。

**青木** エコロジーについても、73年のときに確かに見えていました。でも、日本の場合すぐに忘れてしまうんですよ。89年になって、「ああ、そうだよ」と言ってまた見えて。で、またバブルがはじけて見えなくなって、それが繰り返されているのは非常に情けないような、自分自身もそう思いますが、どうでしょう、

**宮崎** それは世の常だと思います。英語で言うとジェネレーションというのは大体20年から20数年ですが、ジェネレーションごとにどんどん変わっていくのだけれど、昔と同じことを繰り返しているかもしれません。それが現実という面もあると思うので、逆に言うと、それがある意味ではビジネスチャンスとか、そういうのにもつながるのかもしれない。

**青木** だいぶ時間も押してしまいました。以上で対談を終了させていただきます。宮崎さん、どうもありがとうございました。

- \*1: 輸出検査及びデザイン奨励審議会「時代の変化に対応した新しいデザイン政策のあり方—中間答申—」1993年5月
- \*2: ICSID 日本準備委員会「世界インダストリアルデザイン会議 ICSID'73KYOTO の開催について」1972年5月
- \*3: デザイン奨励審議会「デザイン奨励審議会中間答申——70年代のデザイン振興政策のあり方——」1972年8月
- \*4: (財) 日本産業デザイン振興会「デザイン政策研究会」1993年5月

→\*1~4の資料は「デザイン振興政策アーカイブ」に全文掲載されている (<https://design-archives.jp/>)。

\*5: 『成長の限界 (The limits to growth)』は、1970年に世界中の有識者が集まり設立されたローマクラブが1972年に発表した研究報告書。日本語版は、同年ダイヤモンド社から刊行された (大来佐武郎監訳)。

## 5. 質疑応答、閉会「WDO 会議に向けて」

**黒田** 本日、2時に始まりまして、ICSID 会議、デザインイヤーの概要説明、それから 89 年のデザイン会議、デザイン博覧会に関与した当事者によるラウンド・テーブルでの議論・発言、それからそれらの動きの背景にあるデザイン行政をめぐるの宮崎さんと青木さんによる対談がありました。

対談の幾つかの話題の中では、宮崎さんのお話からはわれわれから見えない通産省の思考回路がちょっと見えてきたかなという感じがしました。その辺りも学びながら、デザインサイドとして行政との接点の踏み台にしていけたらと感じました。ラウンド・テーブルの話題の中では、資料から見えてこないデザイン会議の歴史と社会の脈絡など、あるいは会議テーマの底流に流れている日本文化の様子なども窺えたように思います。

それから、会議資料・記録だけではわからない、世界デザイン会議の地域への広がり、社会への広がり、産業界への広がり、そういった裾野に関しても、会議から 10 年、20 年経って、人によって捉え方はあると思いますが、幾つか新たに見えてきたものがあつたのではないのでしょうか。

時間が経って忘れてしまうのは世の常かもしれません。ただ、その世の常に対して、われわれのほうでくさびを打とうという問題意識があつて、そこで少しまた思い起こす。それがまた次に会議、これからのデザインにつながっていくきっかけになればということで、このシンポジウムを企画させていただいたところがあります。

長時間でしたが、ご参加いただいた方の発言の機会もありませんでした。最後にほんの少しの時間ですが、もし今日の議論を聞いて、デザインの歴史を踏まえて未来に向けてこんなことが重要だとか、ぜひここで言っておきたいという方がいらっしゃれば、ご発言をお聞きしたいと思いますが、いかがでしょうか。

**質問者（小川徹）** 今日はとても興味深いお話をありがとうございました。NHK でデザインの仕事をしている小川と申します。

今回のこのシンポジウムは、今年開かれる WDO 世界デザイン会議を契機にしたものだと思いますが、過去 2 回というのは日本の歴史の中で象徴的だったと思

ってしまして、高度成長時代の 1973 年、バブル時代の 1989 年と、それぞれものすごい歴史的な転換点の中で開かれたと思っています。

今年開かれる世界デザイン会議ですが、失われた 30 年と言われたあとに開かれることにはなりますが、この時期に日本からどんなことを発信したらいいのか、あるいは今度の会議がどういう機会になったらいいとお考えなのか、過去にデザイン会議を担われた方々からお聞きできればと思います。よろしくお祈りします。

**黒田** 難しい質問ですが、熟考される時間がないので、ぱっと答えられる範囲でご発言いただける方がいらっしゃったらお願いしたいと思います。

**諸星** 私自身は現在デザインの仕事を現役としてやっているわけではありません。今は高齢者の時代のど真ん中におります。いままでデザイナーとして自分が生きてきた中で、デザインのハレの部分はずうっと持っていたのですが、最近ハレの部分のほうはやたらと多くなる時代だと思うんです。そういう中で、何をハレの問題として生きていくかは重要な課題だと考えています。

高齢者にとってのハレとか、若い人にとってのハレとか、それぞれがあるんだと思います。ものづくりはハレを目標にやっていかないといけないわけで、ケの部分だけでは駄目です。それは長年の経験からものすごくよくわかるので。これからの時代のそういう人たちのハレの部分というのはどういうものなのかというのを、ぜひ検証してもらいたいというのが、まず一つあります。

それから現在、いろいろな地域でいろいろな人が何を考えているかということ、世界共通の問題もありますが、地域によってそれぞれ違う問題がものすごくあると思うんです。これだけコミュニケーション技術が進んでいると言いながら、相互の理解はなかなか進みません。コミュニケートというのは情報を伝えるだけではないです。情報というものが持っている内容が、人と人とが会って伝わっていく話と、ただ知識が知識として、記号が記号として伝わるという話では、情報の伝わり方が違うと思うんです。

だから、老人のハレと若い人のハレ、そういうもの

を議論したときに、伝わっていく、伝えていく内容について、ものすごく気をつけてみんなが議論していく必要があると思いました。ハレの問題の議論は重要なことだと思うので、次の世界デザイン会議では是非やっていただきたいと思います。

**宮崎** 世代ごとにいろいろなものが変わっていく、20年前、30年前と今は全く違います。例えば、数年前でさえ、AIが発展したらどうなるのだろう、ターミネーターみたいなことが起きるのだろうかとか、そのくらいの感じだったと思います。それが現在既にAIは夢物語ではなく、人を殺すか殺さないかみたいところは別としても、われわれが考えていたよりも速く技術革新は進んでいく、そういう状況であると思います。したがって、さらに10年、20年先も含めた想像力を、どうやって確保していくかというのが重要ではないかと思います。現在の課題への対処だけではなくて、将来を先取りして、想像力を高めていく。デザインというのは想像力が非常に大きな要素だと思うので、そういうことを検討していただくといいなと思う次第です。

**黒田** ありがとうございます。ほかにもご意見がある方がいらっしゃるかもしれませんが、このあとの懇親会での議論に引き継ぎたいと思います。

ただ、こういった課題そのものは重要なテーマかなと思いますので、多分秋のWDOの会議のあとになるかもしれませんが、またこういった振り返りの会、前に繋げていくような企画を準備していきたいと思えます。その際は皆さんご参加いただければと思います。

最後に私も一つだけ感想があります。今思うと、73年の世界会議が終わってオイルショックが来ました。89年の世界会議が終わってバブルが崩壊しました。今年の世界会議が終わったあとに何かあるのかというのが、非常に関心のあるところであり、楽しみでもあります。経験的にデザインのピークや話題の盛り上がりがあるのは、時代の変節期という巡り合わせがあるような気がします。そういった先見性も皆さまと共に考えていきたいと思えます。

それでは、最後になりますが、秋のWDO会議に関しまして、日本デザイン振興会事業部長でWDOの理事を務めております津村真紀子さんから説明をお願いいたします。

**津村** 世界デザイン会議東京 2023 事務局長を務めております津村と申します。

いろいろな意味でものすごくハードルが上がったなと今思っておるところでございます。今回の世界デザ

イン会議のテーマは「Design Beyond」です。いろいろな方にご意見をいただきながらこのテーマに致しました。

そもそも、京都から50年、名古屋から34年の今年、なぜまた世界デザイン会議を日本でやることにしたのかということです。私は現在WDOの理事を務めておりますが、理事に就任して国際プラットフォームに参加するようになってわかったことがあります。先ほど日本と世界との向き合い方という話があり、1960年当初からずっと考えてらっしゃったというお話も聞きました。しかしながら、根本的には課題はあまり解決していないのではと感じております。



今現在、日本のデザイン界でどういうことが議論されているか、どういうことが起きているかみたいなことが、多分国際プラットフォームではほとんど認識がされていない、もしくは80年代、90年代ぐらいの話で止まっているなということを、とても強く感じました。これではいかんと思い、現在の日本をなんとか発信できる機会をつくれないうことで、誘致をして開催が決まったということです。

そして、この34年、50年のあいだに、本当にデザインに関する定義とか考え方もたいへん変わってきております。何よりもコロナ禍を契機に世界中が経験したことのない大きなパラダイムシフトが起きた中で、この先デザインが、デザイナーが何ができるのか、何をなし得るのかみたいなことも、考え直す必要があると考えております。それらを本気で考える場にしよう、それを日本でやって発信しようということで、「Design Beyond」というテーマにいたしました。そのあとに、また世界的な何かが起きるのかもしれませんが、ぜひともそれらも乗り越えられる実りのある議論にしていきたいと思っております。

お時間の関係もございませんので、詳しくはウェブ(<https://www.wda2023.tokyo/>)でということになりますが、ざっと会議についてご説明します。10月27日、28日が一般公開のプログラムになっております。27日は主に学会発表のような体裁のものでございます。7月10日にペーパーの提出を締め切ったところですが、このあと査読を経て当日はペーパープレゼンテーションとポスタープレゼンテーションみたいなこと

を中心に、エデュケーションに特化したイベントを千葉大学墨田サテライトキャンパスでおこなう予定でございます。

28日はデザインカンファレンスということで、会場は六本木ヒルズ49階のアカデミーヒルズに移ります。メインテーマに対して「Humanity」「Planet」「Technology」「Policy」という4つサブテーマ領域を設定をいたしまして、それぞれキーノートスピーチのあとに分科会を行って、分科会ごとにステートメントをまとめて、それを最後のアフタヌーンプレナリーで皆さんで共有して明日への展望を考える、そのようなプログラムにしたいと思っております。キーノートスピーカーの方々と、それぞれ分科会のパネラーの方々も決まっております、ウェブでも公開をしておりますので、ぜひ楽しみにしていただけたらと思います。

また、この10月27日、28日の期間は、ミッドタウンではグッドデザイン賞の今年の受賞展をやっております。ぜひ世界デザイン会議にお越しの際には、ミッドタウンにグッドデザイン賞受賞展を観に来てくださいという、そのような建て付けとなっております。10月末は六本木界隈がデザインで大騒ぎになる、そのようなことをイメージして準備しています。

実は、対面参加のチケットが、おかげさまで完売に近いような状況になっています。そこで、多くの人に参加いただくために、会議のライブ配信を考えております。9月ぐらいにライブ配信のチケット詳細などを案内する予定でございます。より多くの皆さまにオンラインでもご参加いただけるように企画を進めておりますので、ぜひ楽しみにしていただけたらと思います。ありがとうございました。

**黒田** 津村さん、どうもありがとうございました。楽しみにしたいと思います。

それでは、これをもちまして、シンポジウム「1973/1989 ICSID 会議と Design Year が残したもの」を終了したいと思います。3時間を超えるシンポジウムとなりました。運営の不便もありましたが、最後までご参加、ご視聴いただきましてありがとうございます。

なお、このシンポジウムの内容に関しましては、秋口になると思いますが、ウェブサイト「デザイン振興政策アーカイブ」で公開いたしますので、ご覧いただければと思います。また、ユーチューブでの配信もそのまま残りますので、ご関心のある方に呼び掛けていただくなり、見直していただくなり、していただければと思います。

そして、もし残された課題、未来に向けての課題について、お気づきのご意見等ありましたら、デザイン

振興政策アーカイブの中に問い合わせのコーナーがありますので、そちらを通じてご意見をお寄せいただければ、私どもで今後のシンポジウム等の参考にさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。そして、主催者一同、また皆さまとお会いできることを楽しみにしたいと思います。

(文責：黒田宏治)